新潟県埋蔵文化財調査報告書 第66集

国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書

百塚東（ひゃくづかひがし）D遺跡

1995

新 潟 県 教 育 委 員 会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書

ひゃくづかひがし
百塚東Ｄ遺跡

１９９５

新　潟　県　教　育　委　員　会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

小千谷バイパスは、小千谷市木津から長岡市妙見町の間を結ぶ延長7.4㎞のバイパスです。小千谷市周辺の現道は道路幅と線形が悪く、市街地では著しい交通渋滞と交通騒音・振動・交通事故等による生活環境への問題は深刻になっています。また、小千谷市浦柄から長岡市妙見町にかけての1.5㎞の区間は、連続雨量150㎜以上で交通止となる事前通行規制区間でもあります。このような諸問題を解決するために本バイパスが計画され、現在早期完成を目指して工事が進められております。

本書は小千谷バイパスの法線内に所在した「百塚東Ｄ遺跡」の発掘調査の成果をまとめた調査報告書です。調査地は、縄文時代後期の三仏生式土器を出土する標識遺跡として全国的に知られている三仏生遺跡と同じ地区に位置しています。

調査の結果、縄文時代の早期から晩期までの土器や信濃川と密接な関係をもつ石錘及び遺構が検出されました。遺構や遺物の数は極めて少ないことから該当地は集落の縁辺部に相当するものと考えられます。

この報告書が、今後の新潟県における縄文時代の歴史を考える一資料として広く活用されると共に、広い意味で文化財に対する理解と認識を深める契機にしていただければ幸いであります。

終わりに、本調査に対して多大なご協力とご援助を賜った建設省北陸地方建設局長岡工事事務所をはじめ、小千谷市教育委員会や地元の方々に厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

新潟県教育委員会

教育長　本　間　栄三郎

例　　言

1　本報告書は新潟県小千谷市大字三仏生（さんぶしょう）に所在する百塚東Ｄ遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は、一般国道17号線小千谷バイパス取り付け道路工事に伴い、新潟県が建設省から受託して実施した。

2　発掘調査は平成５年に新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」と略す）に調査を委託したものである。

3　発掘調査は平成５年６月14日から８月19日まで実施し、整理および報告書作成にかかる作業は平成５年度及び６年度に行った。

4　出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管している。遺物の注記番号は百塚東Ｄ遺跡を「百東Ｄ」として出土地点・層位等を併記した。

5　本書の作成は埋文事業団調査課第二係職員が当たり、寺崎裕助（同第二係長）の指導のもと江口友子（同文化財調査員）が担当した。報告書の執筆は小田由美子（現文化行政課文化財調査員）・羽賀信幸（現県立津南高等学校教諭）・江口が当たった。執筆分担は第Ⅳ章１・第Ⅴ章１・第Ⅵ章が小田、第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章２が羽賀、第Ⅳ章３・第Ⅴ章２が江口である。編集作業は江口が担当した。

6　本書は本文と図版からなる。図面は挿図として本文中におさめ、写真は巻末図版にまとめた。

7　遺構番号は調査現場で付したものをそのまま使用し、すべて通し番号とした。種別は土坑（ＳＫ）、穴（Pit）、その他（ＳＸ）で区別し、番号の先頭に付した。遺物番号はすべて通し番号とした。実測図・写真図版の番号も同じである。

8　遺物については、遺構に伴うものが少なかったため、出土遺構ごとの記述とはなっていない。縄文土器・石器については観察表を付したので出土地点については表を参照されたい。

9　引用文献は著者と発行年（西暦）を［　］で文中に示し、巻末に一括して掲載した。

10　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。厚くお礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

小千谷市教育委員会　　神林昭一　　吉越正勝

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 1
1　歴史的地理的環境 …… 1
2　周辺の遺跡 …… 3
第Ⅲ章　調査の概要 …… 5
1　第一次調査 …… 5
2　発掘調査の方法と経緯 …… 5
3　整理作業 …… 6
4　調査体制　A　発掘調査　B　整理作業 …… 6
第Ⅳ章　遺　　跡 …… 7
1　概　　観 …… 7
2　基本土層 …… 8
3　遺構各説 …… 10
第Ⅴ章　遺　　物 …… 13
1　縄文土器・土製品 …… 13
2　石　　器 …… 16
第Ⅵ章　ま　と　め …… 24
《引用・参考文献》 …… 24

表　目　次

1　周辺の縄文時代の遺跡一覧表 …… 4
2　縄文土器・土製品観察表 …… 17
3　石器観察表 …… 20

挿　図　目　次

1　小千谷市周辺の河岸段丘面 …… 2
2　位置と周辺の縄文時代の遺跡分布図 …… 4
3　基本土層 …… 8
4　周辺の地形と全体図 …… 9
5　遺構実測図1 …… 11
6　遺構実測図2 …… 12
7　縄文土器実測図1 …… 14
8　縄文土器実測図2・土製品実測図 …… 16
9　石器実測図1 …… 19
10　石器実測図2 …… 21
11　石器実測図3 …… 22
12　石器実測図4 …… 23

図　版　目　次

1　調査区遠景（朝日山頂上から）／完掘状況／完掘後漸移層地山確認状況
2　基本土層断面／包含層遺物出土状況／遺構確認状況／ＳＫ２・ＳＫ３完掘／ＳＫ２土層断面
ＳＫ２完掘／ＳＫ３土層断面／ＳＫ３完掘
3　Ｐit24検出状況／Ｐit24土層断面／集石41・集石42検出状況／集石41検出状況／集石41土層断面
集石41完掘／風倒木痕からの遺物出土状況／石錘出土状況
4　縄 文 土 器 1
5　縄文土器２・土製品
6　石　器　1
7　石　器　2
8　石　器　3

第Ⅰ章　調査に至る経緯

今回報告する百塚東Ｄ遺跡の所在する小千谷市三仏生地区は、土器や石器の散布地として知られ、明治時代の末頃から地元の収集家によって表面採集されていた。昭和30年代に三仏生遺跡の発掘調査が行われ、そこから出土した縄文時代後期の土器が、「三仏生式土器」と命名され［中村1957］、新潟県の縄文時代後期中葉の標式土器となっていることは周知のことである。

小千谷バイパス建設計画立案に伴い、ルート選定の事前調査として昭和54年に信濃川左岸から小千谷市街へかけて、埋蔵文化財の分布調査が行われた。この調査によって縄文時代・平安時代の遺跡が多数発見された。この結果にもとづいて有名な『百塚』を避けて平成４年３月にルートが決定され、同年４月にルート内の分布調査を行い、第一次調査の必要な部分を決定した。

国道351号線から小千谷バイパスへの取り付け道路部分は、工事の進行上早急に第一次調査を実施するよう県教委に要望があったため、事業団が県教委からの委託を受け、第一次調査を平成４年７月20日から24日までの４日間にわたって実施した。調査の結果、百塚東Ｄ遺跡は第二次調査が必要となり、第二次調査は平成５年６月14日から実施した。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

１．歴史的地理的環境

百塚東Ｄ遺跡の所在する小千谷市は、新潟平野の南部に位置する人口約44,000人、面積約154.49㎢の市である。市内の中央部を信濃川が流れ、信濃川を挟んだ両側の河岸段丘面上に市街地が形成されている。

近世の小千谷は信濃川舟運上の要所として栄えた。また越後上布を改良した「小千谷縮」の産地として、手工業もさかんであった。戊辰戦争時には長岡藩家老河井継之助と官軍軍監岩村精一郎が小千谷市の慈眼寺で直談判を行ったり、朝日山の戦いや、榎峠の戦い等は北越戦争として有名である。

百塚東Ｄ遺跡の所在する「三仏生」という地名については、江戸時代初め頃の信濃川の大洪水の時、三体の仏像が流れついたことから、岩野村を三仏生と改めたという伝承がある。三仏生集落の西側を通る市道高梨－三仏生線東沿いには、千谷と三仏生の境から高梨方面に約１㎞にわたって塚が百数十基整然と並列している。塚の平均直径は約４～５ｍ、高さ約1.2ｍで、塚の上には江戸時代後期の銘のある石仏が置かれている。これは「百塚」と呼ばれ、塚は中世に造られたという伝承もあるが、いつ頃、何のために造営されたのか詳細は不明である［佐藤1982］。小千谷市は典型的な日本海式気候で、年間降水量が多く、特に冬期は降雪量がきわめて多く、全国でも有数の豪雪地帯である。１日１ｍを超す降雪があることも珍しくない。また、小千谷市は新潟平野の南部に位置しており、市の周辺の山地は200～500ｍ級の第三紀褶曲丘陵群から形成されている。長野県に源を発する信濃川は、小千谷市の東隣りの川口町で大きく蛇行しながら魚野川と合流する。信濃川中流域は河岸段丘が発達し、中魚沼郡津南町から十日町市、小千谷市を経て三島郡三島町あたりまで広く分布しているが、この段丘はいずれも信濃川とその支流が作った河岸段丘

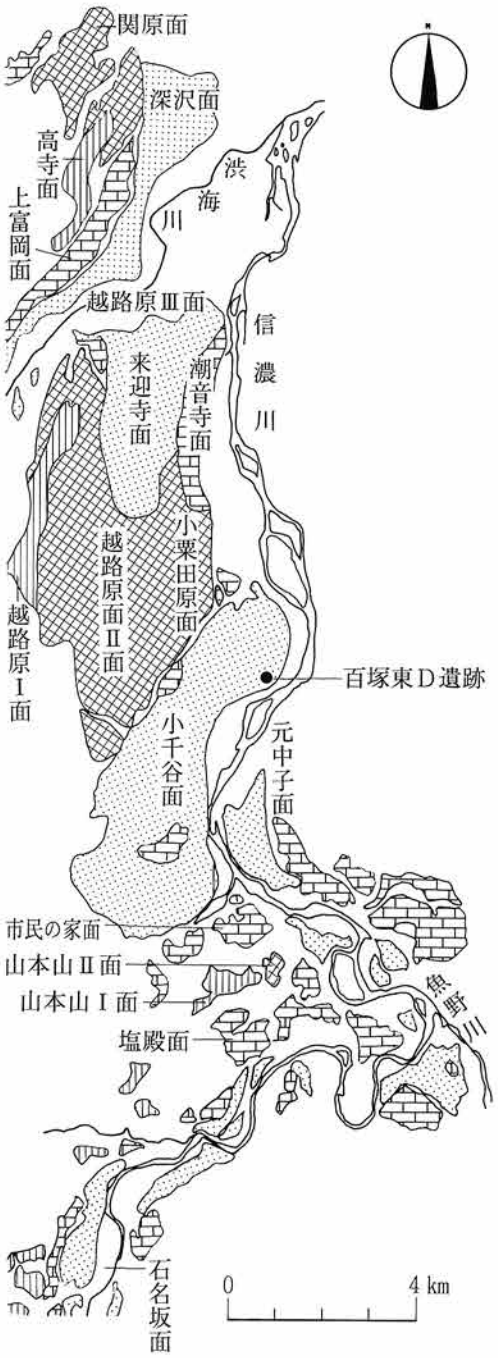
である。

これらの段丘は、第四紀の中期更新世から完新世にかけて形成された。第四紀は氷河時代であるとともに世界的に大地が上昇した時代であり、また人類が出現した時代でもある。段丘は氷期と間氷期との海水面変動と隆起運動によって作られたと考えられる。信濃川流域の河岸段丘は魚沼層群を基盤としている。魚沼層群は鮮新世後期から更新世前期を通じて堆積した大規模な地層である。その後魚沼層群は隆起と褶曲を続け丘陵を形成した。中期更新世からは氷河性海水面変化により段丘形成の時代となった。段丘面上には信濃川ローム層［新潟火山灰グループ1981］が堆積している。これは中期更新世から後期更新世（約40万年前～数千年前）にかけて堆積した風成で褐色の風化火山灰層の総称である。火山灰層は全般的に南西から北東へ層厚を減少させる傾向がある。信濃川ローム層の特徴は、信濃川上流部（南西部）では厚く堆積し、火山灰の粒子のわかる粗粒な火山灰層が堆積している。一方、小千谷市を含めた信濃川下流部（北西部）では、火山灰の粒度が細かいものばかりで、さらに風化が進み堆積の状況がわかりにくく一見すると褐色土にしか見えない。これを野外で火山灰層として層区分することは、容易ではない。小千谷市周辺では、妙高・黒姫・飯綱火山から供給された火山灰が多い。

小千谷市付近の河岸段丘は、主として信濃川の左側地域に分布していることが大きな特徴である。また山本山周辺地域、浦柄－三仏生地域は信濃川が大きく蛇行している。河川の蛇行は一方の岸を侵食し、他方の岸に堆積面を広げていき、これが段丘面の成長の一因である。

段丘地形には平坦な面にある地名をとって、面ごとに命名されている。小千谷市域の段丘は、完新世の段丘面として、元中子面・小千谷面、更新世の段丘面として、潮音寺上ノ山面・船岡山面・小粟田原面－市民の家面・越路原Ⅰ面等があげられる（第1図参照）。

三仏生地区は小千谷面上の東端にある。小千谷面は信濃川ローム層がないことから完新世に形成された段丘であることがわかり、その形成期は6,000～10,000年前と推定される。これは地質学的にはきわめて最近のことと言える［吉越1992］。



第1図　小千谷市周辺の河岸段丘面
（『日本の地質4　中部地方Ⅰ』1988より）

2．周 辺 の 遺 跡（縄文時代の遺跡を中心として）

小千谷市の遺跡は、その多くが信濃川左岸の河岸段丘面に分布する。段丘面別でみると、小千谷面と小粟田原面に多く立地する傾向がある。地区別にみると、特に片貝町・三仏生及び芋坂付近に集中している。小千谷市域では縄文時代の遺跡が数多く発見され、周知の遺跡の約85％を縄文時代の遺跡が占めている。縄文時代のうち、早期・前期は遺跡数が少なく、これらの遺跡から出土した資料は断片的であり、全体像を知るには不十分である。中期になると遺跡数は急増し、中期でも特に中葉が最も多い。後期の遺跡も中期と同様に数多く発見されているが、晩期の遺跡数は減少する。

小千谷市内の遺跡は、主に以下の遺跡で発掘調査が行われているが、発掘件数は多くない。小千谷市内で最初の発掘調査を行ったのは三仏生遺跡（26）である。遺跡は昭和初期から遺物の出土地として知られていた。昭和13年頃から近藤勘治郎氏によって数度の調査が行われたが、計画的な発掘調査までには至っていなかった。戦時中の破壊と、耕作による遺跡の破壊が急速に進んでいるため、昭和30年８月３日から一週間に亘って、長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏らによって本格的な発掘調査が行われた。遺構として竪穴住居跡・楕円形の石組炉跡が検出された。出土した土器の大部分は関東の加曽利Ｂ式に並行し、縄文時代後期中葉に位置づけられた。それは信濃川流域に発達した地方色の濃厚な土器であることから「三仏生式土器」と命名された。三仏生遺跡は縄文時代後期中葉が中心となる時代だが、中期から晩期初頭までの継続が認められている［中村1957］。

大平遺跡（84）は昭和31年８月20～25日までの間、小千谷市教育委員会によって発掘調査が行われた。遺跡の立地は信濃川の河床との比高差約110ｍの河岸段丘である山本山Ⅱ面上である。遺物は塔ケ崎式期（加曽利Ｅ式並行）の新しい時期に所属するものから三十稲場式まで出土しており、時期は縄文時代中期後半から後期初頭の土器類である。遺構としては住居跡と炉跡が検出された［遠藤1987］。

徳右ヱ門山遺跡（59）と中道遺跡（61）は昭和60年・61年に小千谷市教育委員会によって発掘調査が行われた。徳右ヱ門山遺跡で出土した土器は、縄文時代中期中葉が主体を占める。遺構としては、住居跡10軒・土坑４基・石囲炉１基が検出された。中道遺跡で出土した遺物は、縄文時代前期から後期・弥生時代・平安時代までの長期にわたっている。しかし、遺構並びに遺物の出土量は少なく、長時間にわたる人の営みが見い出されたわりには極めて断続的なあり方を特徴としている。［遠藤1987］。

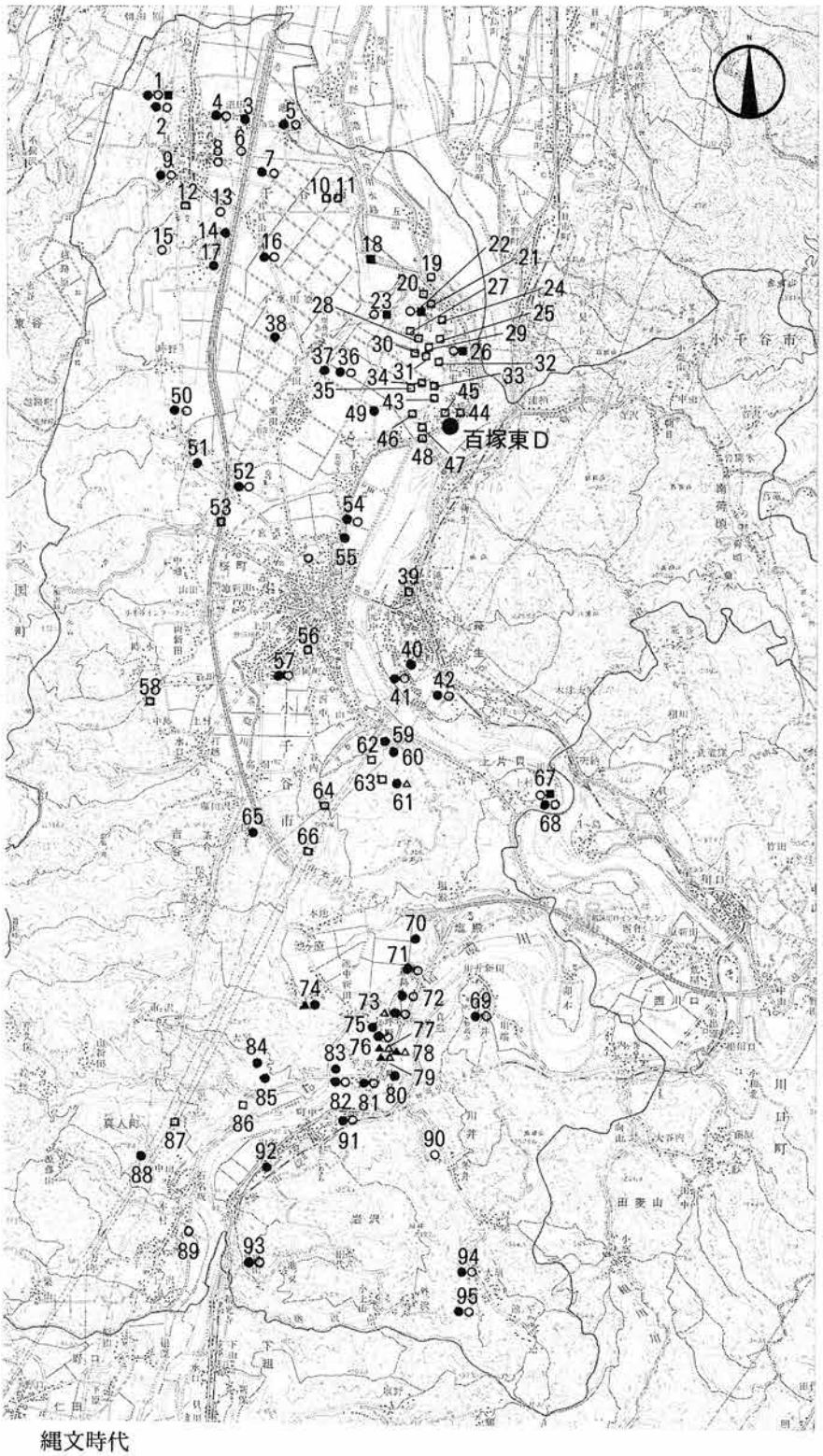
城之腰遺跡（52）は昭和53年から56年にわたって新潟県教育委員会によって発掘調査が実施された。その結果、縄文時代中期後葉から後期前葉の集落のほぼ100％を調査した。遺構群は重複が著しく、いくつかの円環状を呈する集落の複合とみられる［藤巻1991］。

その他小千谷市域の代表的な遺跡として、縄文時代早期では蟹沢遺跡（77・78）・三仏生遺跡から断片的ではあるが、楕円形押型文土器が出土した。前期の遺跡として、繊維痕のある羽状縄文の土器が蟹沢遺跡で出土している。中原遺跡（76）では諸磯Ａ式土器が出土した。早期・前期の遺跡は芋坂付近に集中している傾向がある。中期の遺跡は遺跡数・規模ともに大きい。中期の代表的な遺跡として、前葉の細島遺跡（71）、中葉の前野遺跡（51）、後葉の元中子遺跡（41）があげられる。前野遺跡から馬高式土器が出土した。後期の遺跡では、矢原遺跡（68）・元中子遺跡から本県特有な様式である三十稲場式土器・三仏生式土器の典型的な資料が出土した。小粟田原№２遺跡（37）は後期単独の遺跡である。晩期の遺跡として町裏遺跡（８）・上の山遺跡（57）・大明神遺跡（67）があげられる。晩期のみの単独の遺跡は皆無である。

2．周辺の遺跡

第１表　周辺の縄文時代の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代
1	俣沢	縄文（中～晩）
2	婆々懐	縄文（中・後）
3	沼田	縄文（中）
4	延命寺	縄文（中・後）
5	池津	縄文（中・後）
6	前原	縄文（後）
7	寺社脇	縄文（中・後）
8	町裏	縄文（晩）
9	十三畑	縄文（中・後）
10	前原A	縄文
11	前原B	縄文
12	焼山	縄文
13	大屋敷	縄文（後）・須恵器
14	南だれ	縄文（中）
15	魚無沢	縄文（後）
16	前原	縄文（中・後）
17	渦の巣	縄文（中）・須恵器・鬲・土製
18	青池	縄文（晩）
19	三古橋	縄文
20	野中	縄文・須恵器・土師器
21	北高梨	縄文・須恵器・土師器
22	上野	縄文（後・晩）
23	平沢	縄文（後・晩）
24	百塚西A	縄文
25	百塚西B	縄文
26	三仏生	縄文（後・晩）・弥生（後）
27	欠の上A	縄文・土師器
28	欠の上B	縄文・土師器・須恵器
29	欠の上C	縄文・土師器・須恵器
30	欠の上D	縄文・土師器・須恵器
31	欠の下	縄文・須恵器
32	百塚西C	縄文
33	百塚西D	縄文・土師器
34	割目A	縄文・土師器・須恵器
35	割目B	縄文・土師器・須恵器
36	館清水	縄文（中・後）
37	小梁田原No.2	縄文（後）
38	小梁田原No.1	縄文（中）
39	滝原	縄文
40	大清水	縄文（中）
41	元中子	縄文（中・後）
42	上殿原	縄文（中・後）
43	百塚東A	縄文・土師器
44	百塚東B	縄文・土師器・須恵器
45	百塚東C	縄文
46	金塚	縄文
47	百塚東E	縄文
48	百塚東F	縄文・須恵器
49	鶴ケ丘	縄文（中）・弥生・須恵器
50	菱藤六	縄文（後・晩）
51	前野	縄文（中）
52	城之腰	縄文（中・後）
53	天辺原	縄文
54	道金原	縄文（中・後）
55	下原	縄文（中）
56	船岡山	縄文
57	上の山	縄文（中・後）
58	時水	縄文
59	施右ヱ門山	縄文（中）
60	中道東	縄文（中）
61	中道	縄文（前・中）
62	下池Ⅰ	縄文
63	下池Ⅱ	縄文
64	山王林	縄文
65	四ツ子山	縄文（中）
66	中平	縄文
67	大明神	縄文（後・晩）
68	矢原	縄文（中・後）
69	妙高寺	縄文（中・後）
70	獅子ケ平	縄文（中）
71	細島	縄文（中・後）
72	塞の神	縄文（中・後）
73	上の原	縄文（前～後）
74	大石畑	縄文（早・中）
75	下の開農	縄文（中）
76	中原	縄文（中・後）
77	下蟹沢	縄文（早・前）
78	上蟹沢	縄文（早・前）
79	墓地の下	縄文（早・前）
80	八幡様	縄文（中）
81	稲荷堂	縄文（中・後）
82	観音堂	縄文（中・後）
83	上の開農	縄文（中）
84	大平	縄文（中）
85	林中	縄文（中）
86	殉ケ平	縄文
87	臼坂	縄文
88	大北沢	縄文（中）
89	三木明	縄文（後）
90	冬井	縄文（後）
91	島	縄文（中・後）
92	山谷(向ケ平)	縄文（中）
93	岩山	縄文（中・後）
94	大崩北	縄文（中・後）
95	大崩南	縄文（中・後）



第２図　位置と周辺の縄文時代の遺跡分布図
（国土地理院発行 平成2年「長岡」昭和59年「小千谷」1:50,000原図）

第Ⅲ章 調 査 の 概 要

1．第一次調査

百塚東Ｄ遺跡の第一次調査は平成４年７月20日から24日まで実施した。調査方法は法線内にトレンチを任意に設定し、バックフォーと人力によって、堆積土を徐々に薄く掘削・精査して、遺構・遺物の検出に努め、トレンチの位置・土層の状況等を記録した。調査の結果、確認トレンチにおいては遺構は全く認められなかったが、黒色土中に、２枚の縄文時代の遺物包含層の存在を確認した。このことから百塚東Ｄ遺跡調査範囲は、遺跡本体の縁辺部にあたるものとみられ、第２次調査の実施が必要となった。

2．発掘調査の方法と経過

グリッドの設定（第４図）　グリッドは10ｍ方眼とし、調査地全域をカバーした。グリッドの基線は道路法線のセンター杭に基づいて設定した。センター杭№９＋10.0と№12＋10.0を見通す東西緯線を基線とし、５ｍ北側の東西緯線をＢライン、５ｍ南側の東西緯線をＣラインとした。センター杭№９＋10.0を通り、Ｂライン、Ｃラインと直交する南北経線を２ラインとし、これにより10ｍメッシュを組んだ。グリッドの呼称は、法線に沿った西から東へ数字の１～９、これに直交するラインを北から南へＡ～Ｃとした。この１グリッド（10×10ｍ）を大グリッドとし、この中を２×２ｍの小グリッド、25個に細分した。したがって、小グリッドまでの呼称は６－Ｂ－13区というように表わした。なお、グリッドは国土地理院の座標軸に対して約25度東偏している。グリッド杭の打設及びレベル値の測定は業者委託とした。グリッド杭のレベルは信濃川距離標・左岸№ 317.5より引用したものである。

調査方法　第一次調査の結果、第二次調査対象面積は1,700㎡とした。第二次調査の方法は、まずバックフォーで表土を地表から平均30cm位除去し、遺物包含層の上面で止めた。排土はクローラーダンプで所定の場所に運搬した。遺物包含層からは人力により掘削を行い、ベルトコンベアを排土置場まで連ねて排土を処理した。遺物包含層での遺物の出土量は、石器を中心とし、少量であった。遺物包含層での出土遺物は小グリッドごとにまとめて取り上げた。遺物包含層の発掘後、遺構精査を実施したが、大半が風倒木痕で遺構の分布は極めて希薄であった。東側の調査範囲境界付近で遺構が検出されたため、調査を10ｍ東側に延長して実施することとし、延長部分は表土から全て人力で掘削した。漸移層から地山にかけて旧石器時代から縄文時代草創期の遺物の出土の可能性があるため、任意にトレンチを設定し発掘を試みたが遺物は確認できなかった。遺構実測は20分の１を原則とした。

工夫した点として、遺構確認時や完掘時のマーキングには水で練った石灰を使用して、経費節減に努めた。スプレーよりも耐久性があり、効果的だった。

3．整　理　作　業

百塚東Ｄ遺跡の発掘調査終了後、小千谷バイパス第一次調査、南魚沼郡津南町の屋敷田遺跡の第一次調査・第二次調査を実施して、12月中旬に現場作業を終了した。12月中は平成５年度調査の基礎整理作業のため、本格的な整理作業は、翌平成６年１月から実施した。出土遺物の洗浄・注記・図面・写真の整理は大半を発掘現場で実施した。一部残ったものは現場終了後に事業団本部で行った。本格的な整理作業は１月から３月までを要し、現場担当職員３名と日々雇用職員１名とで分担して当たった。12月12日から平成７年３月31日までは諸作業と編集を行った。

4．調　査　体　制

A　発掘調査

第一次調査

調査期間　平成４年７月20日～７月24日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

調査職員　藤巻　正信（調査課第二係長）

赤羽　正春（　〃　主任）

木村　孝一（　〃　嘱託員）

第二次調査

調査期間　平成５年６月14日～８月19日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

管　　理　藍原　直木（専務理事・事務局長）

渡辺　耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶　　務　藤田　守彦（総務課主事）

調査指導　寺崎　裕助（調査課第二係長）

調査担当　小田由美子（　〃　専門員）

調査職員　羽賀　信幸（　〃　専門員）

江口　友子（　〃　嘱託員）

B　整理作業

整理期間　平成６年１月４日～３月31日　12月12日～平成７年３月31日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

整理・報告　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

第Ⅳ章　遺　　跡

1．概　　観

百塚東Ｄ遺跡は信濃川の中流域の段丘面、小千谷面に位置し、現在の信濃川から約150ｍ離れている。この段丘面には他にも多くの遺跡が存在しており、縄文時代後期の標識遺跡となっている三仏生遺跡もこの段丘面に所在し、百塚東Ｄ遺跡からは約１㎞の距離にある。

第一次調査の段階では遺物量が少なく、遺構は全く検出されなかったため、調査対象部分は集落等の縁辺部にあたると考えられた。第二次調査の結果でも、遺構・遺物の検出はほとんどなかった。1,700㎡の調査範囲で、遺物は平箱（34×54.5×9.5㎝）で６箱の出土しかなかった。また、地山の検出時に調査範囲の中心部が最も低くなり、水がたまりやすいという状況が確認でき、地形的にも恵まれていなかったようである。地形から見ると遺跡の中心は微高地である調査区の南側、現在宅地となっている部分に存在すると考えられる。出土遺物は量的に少なく、土器は耕作の影響を受けたためか細片ばかりであった。縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期と縄文時代を通じて検出され、百塚東Ｄ遺跡を特徴づけている。その他の出土遺物では非常に大型の礫石錘の出土が特筆されるほか、石鏃・打製石斧・磨製石斧・ピエス＝エスキーユ・不定形石器・磨石等が出土している。その多くは表土・包含層からの出土であった。遺構は信濃川に近い遺跡の北側で土坑が２基隣合って検出されているほか、集石が２基検出されたのみである。１基の土坑の覆土上層からは磨製石斧（９）が出土している。他には風倒木痕が多く、土器が巻きこまれた状態で出土しているものがある。

遺跡の現況は畑で、耕作の影響をかなり受けていた。遺物包含層はⅡ層とⅢ層に分けることができたが、耕作の影響で層位的に遺物を取り上げることはできなかった。近・現代の溝や施設も多く、遺構との識別が困難であった。しかし、縄文時代の遺構の方が覆土のしまりがよく、細かな焼土・炭化物等を多く含んでいた。遺構の確認は漸移層の直上でも可能であったが、近・現代のものとは区別できなかった。

発掘調査の最後に縄文時代草創期の遺物・遺構の確認を行った。遺物包含層と地山の間に暗黄褐色土の漸移層が厚く堆積し、小千谷面の形成期が6,000年から10,000年前に想定されているため、縄文時代草創期の遺物・遺構が存在する可能性があったためである。任意に２×２ｍのトレンチを設定し、1,700㎡の調査範囲内で20ケ所以上確認した。すべて人力でジョレンを使用して丁寧に掘削した。確実に地山と考えられる層を抜いて掘削したが、風倒木痕や木の根痕等にからんだ縄文時代早期以降の遺物が散発的に出土したのみで、縄文時代草創期や旧石器時代の遺物・遺構の確認はできなかった。同じく平成５年度に行ったバイパス法線内の第一次調査でも、地山の状態が、粘土質、細かい砂質、粗い砂質、段丘礫層にすぐ当たる地点等と変化が著しく、信濃川の河道がかなり変遷したことをうかがわせた。今回の調査では縄文時代草創期の遺物がどの層から出土するか確認されなかったが、今後もこうした確認調査は必要と思われる。

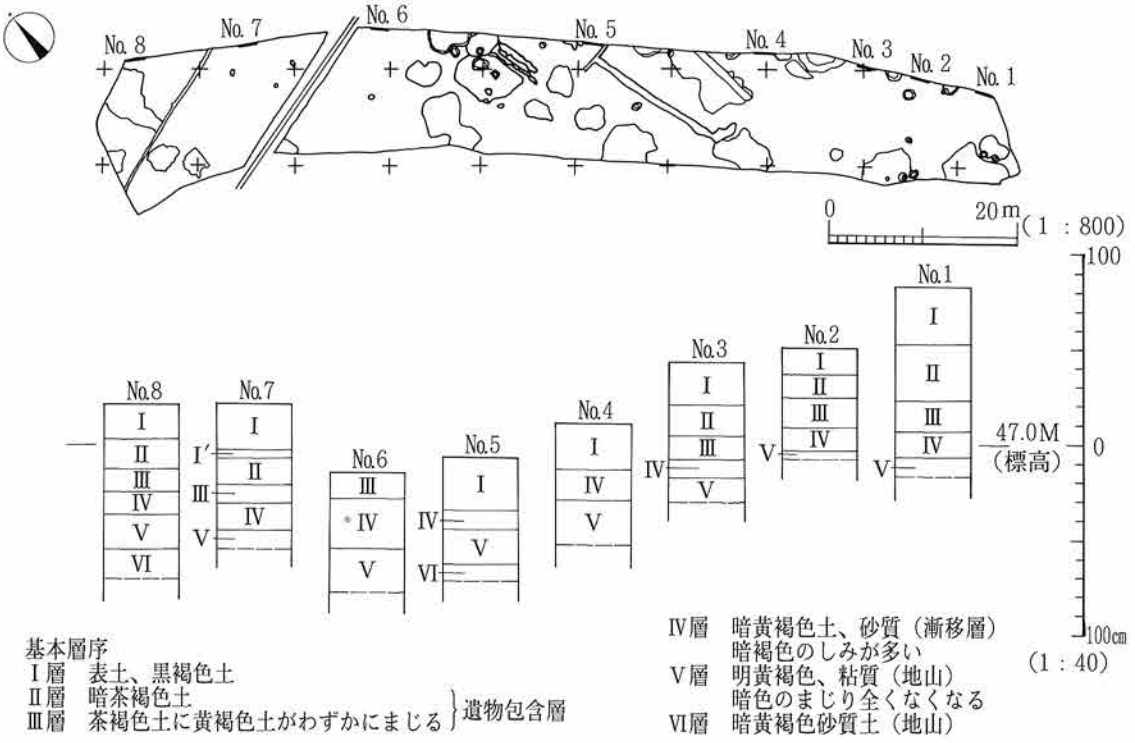
2．基　本　土　層

百塚東Ｄ遺跡は信濃川左岸の河岸段丘である小千谷面の東端に位置する。調査区の現況は畑・水田であり、ほぼ平坦である。近・現代の耕作によると思われる溝状の攪乱が数本認められた。一部、削平したことによって遺物包含層が欠如した部分もあったが、おおむね旧状をとどめていた。攪乱からは縄文土器・石器等の遺物が出土した他、近・現代の陶磁器や鉄製品も出土している。

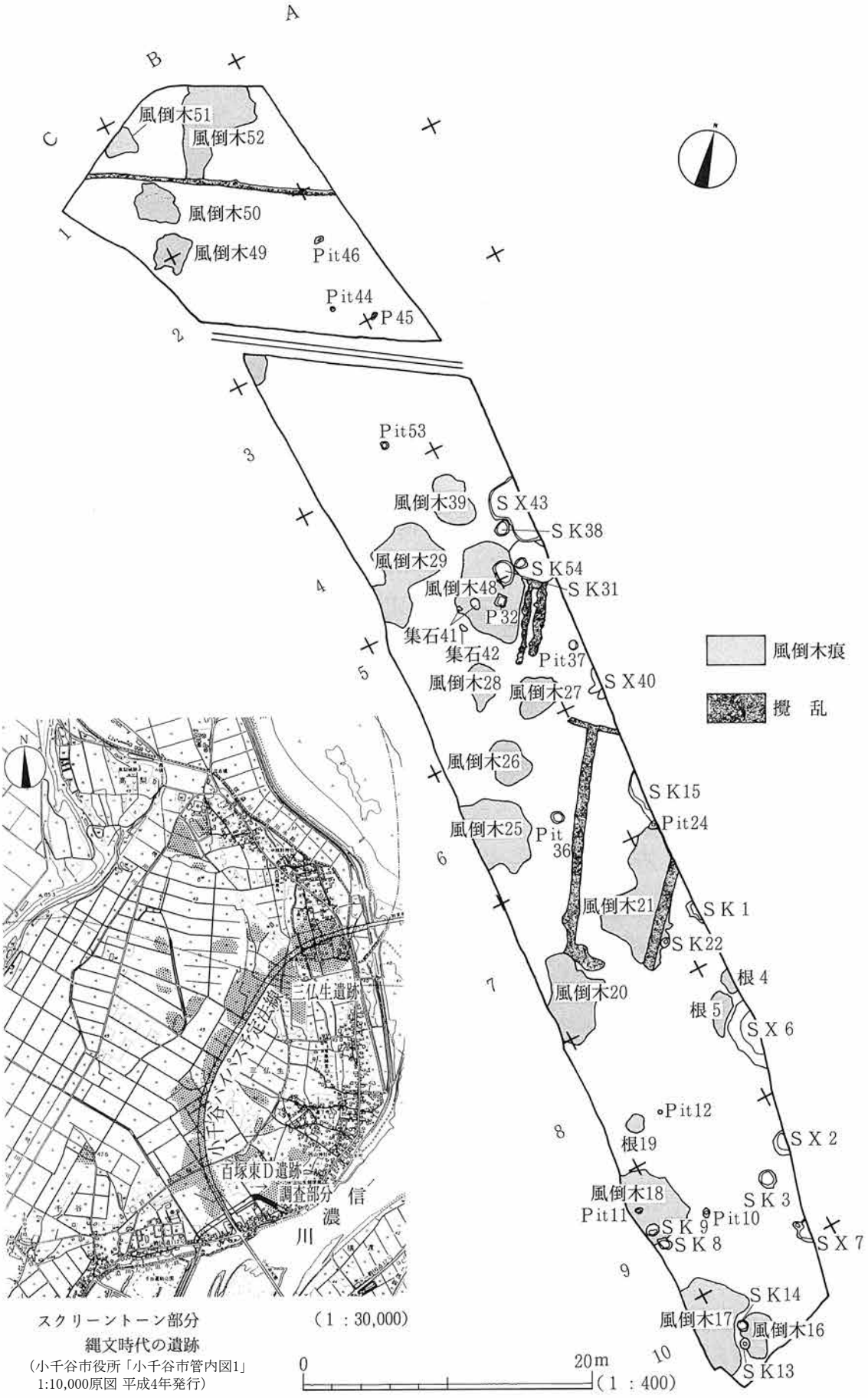
今回の調査においては、６層からなる土層を確認した（第３図）。各層は色調・粘性・包含物質等によって区分した。今回の調査範囲での土層は部分的には差異もあるが、おおむね同一の層序となった。

第Ⅰ層（表土層）の堆積は平均約30cmであった。第Ⅱ層と第Ⅲ層は遺物包含層で、堆積は平均約30cmである。遺物の時代は両層とも縄文時代であり、遺物出土量は少量であった。第Ⅱ層よりも第Ⅲ層の方がやや多く遺物が出土している。出土遺物からは第Ⅱ層と第Ⅲ層とで、遺物包含層の新旧関係は確定できなかった。第Ⅳ層（地山漸移層）の堆積は平均15cmであるが、一部厚く堆積しているところもあった。ここからも木の根等の落ち込みから、遺物が少量出土している。第Ⅴ層（地山層）は全体的には粘質であるが調査区西側では砂質であった。第Ⅵ層は第Ⅴ層と同様に砂質であるが、色調は暗黄褐色土で、第Ⅴ層より暗い。この層からの遺物の出土は全くなかった。第Ⅵ層は調査区東側では認められなかった。

全体的には表土層・遺物包含層より下の暗黄褐色土層は粒子が粗く、手触りはさらさらとしていて砂質である。調査区西側では表土層直下の第Ⅱ層（遺物包含層）から砂質であった。調査範囲の中央付近では耕作の影響をかなり受け、表土層下はすぐに砂質の地山漸移層であった。ここでは第Ⅱ層と第Ⅲ層は認められず、明確な包含層は検出されなかった。また、縄文時代草創期の遺物・遺構を確認するため、第Ⅵ・第Ⅴ層で確認トレンチを入れたが検出には至らなかった。



第３図　基　本　土　層



スクリーントーン部分
縄文時代の遺跡
(小千谷市役所「小千谷市管内図1」
1:10,000原図 平成4年発行)

第4図　周辺の地形と全体図

3．遺　構　各　説

ＳＫ－２　（第５図・図版２）９－Ｂ－２グリッドに位置する不整楕円形のフラスコ状土坑である。北側は調査区域外となるため全容は不明である。上端長径167㎝・下端長径140㎝、Ⅱ層からの深度は150㎝を測る。遺構検出当初は陥し穴状遺構かと思われたが、掘削が進み底部が外側に張り出したことからフラスコ状土坑とした。西側壁はごくわずかな凹凸があるものの、ほぼ垂直に底部に向かい、120㎝ほど下がったところから外側に張り出している。底面は中央部がわずかに盛り上がっている。東側壁は中段で内側へ狭まってから外側に張り出すために、幅25㎝程のテラス状になっている。このテラスは西側壁直前で途切れ、東側壁で最大幅となり北側へ続くものと推定される。

土層は自然堆積であり、黄茶褐色から暗茶褐色の土がレンズ状に堆積している。６層からは遺物が出土しているが、砂質の黒褐色土で粘性は強い。また黄褐色土の小ブロックや炭化物・焼土を含んでおり、底の方ほど多くなっている。出土遺物は後期～晩期の縄文土器４点とガラス質安山岩製の剥片１点である。

ＳＫ－３　（第５図・図版２）９－Ｂ－３グリッドに位置する円形土坑である。上端長径117㎝・上端短径107㎝、下端長径90㎝・下端短径80㎝、Ⅱ層からの深度は58㎝を測る。側壁の中段の一部が14～18㎝ほど外へ張り出している。

土層は自然堆積である。９層は茶褐色土に黄褐色土が混じり、炭化物や焼土も混じる。出土遺物は、上層から砂岩製不定形石器１点、Ⅱ層から凝灰岩製剥片１点とガラス質安山岩製の不定形石器１点、Ⅴ層上面から砂岩製の磨製石斧（第10図・図版９）１点と頁岩製の剥片１点が出土している。Ⅴ層から縄文土器が１点出土している。ＳＫ－２との距離は約1.3ｍである。

Pit24　（第６図・図版３）６－Ａ－20グリッドに位置する不整形のPitである。上端長径60㎝・上端短径40㎝、底面は円形で直径26㎝、地山からの深度は35㎝を測る。

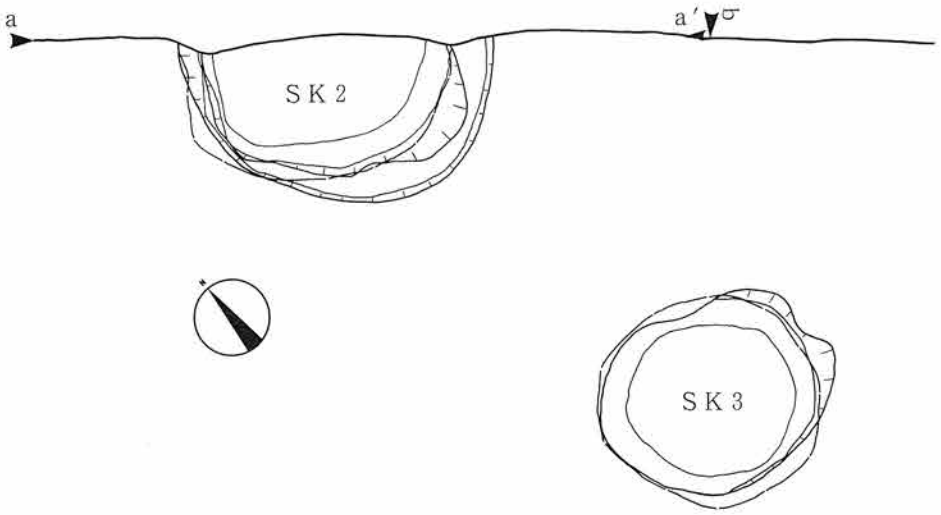
土層は自然堆積である。Pitの上層から後期～晩期の縄文土器５点、下層からも後期～晩期の縄文土器２点が出土している。この他にPitは検出されなかった。

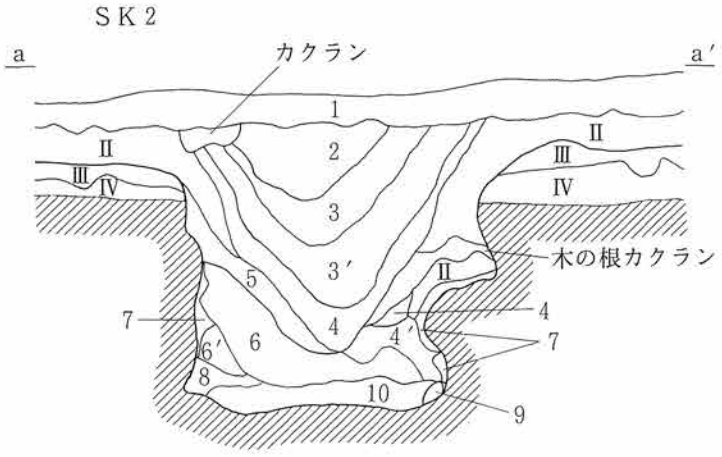
集石41　（第６図・図版３）４－Ｂ－10グリッドに位置する集石である。東西60㎝・南北160㎝の範囲に集中している。覆土は炭化物や焼土を多く含んでいる。集石41は風倒木痕48（標高47.70ｍを測る。出土土器は縄文時代後期）の直上にあり、標高は47.90ｍを測る。

集石を構成しているものは、安山岩製の磨石２点、砂岩製の石皿（接合完形・被熱）１点、砂岩製の磨石（被熱）１点、砂岩製の石核１点、安山岩の自然石４点（１点は被熱・スス付着）、砂岩の自然石５点（３点は被熱・スス付着）、凝灰岩の自然石５点（１点は被熱・スス付着）である。後期の縄文土器が６点出土している。

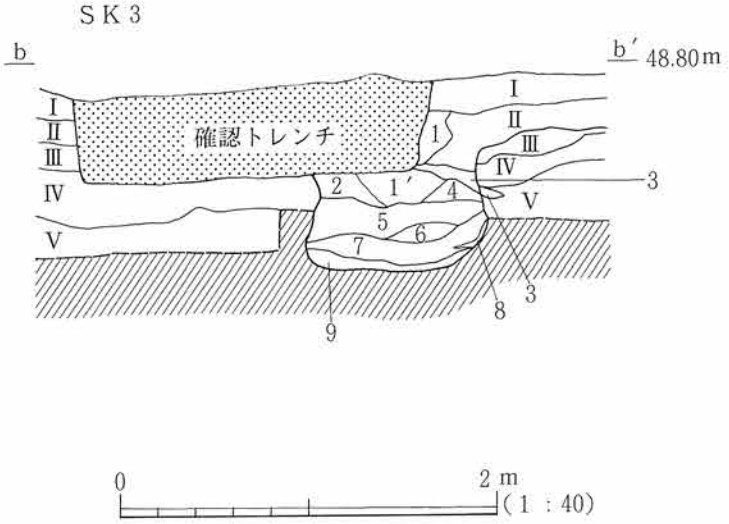
集石42　（第６図・図版３）５－Ｂ－16グリッドに位置する集石である。東西40㎝・南北70㎝の範囲に集中している。標高は47.90ｍを測る。

安山岩製の磨石が１点出土している。その他の石５点（安山岩２点・ガラス質安山岩２点・砂岩１点）は自然石である。縄文時代後期の網目状撚糸文を施した土器が１点出土している。集石41との距離は約1.0ｍである。





1　カクラン
2　黄茶褐色土、砂質土、しまりがよい
　ごく小さな（1㎜）炭化物、焼土をごくわずかに含む
3　茶褐色土、砂質土、粘性強、しまりがよい
　ごく小さな炭化物、焼土をわずかに含む
3′茶褐色土、砂質土、粘性弱、しまりがよい
　小さな（5㎜）炭化物、焼土を多く含む
4　暗茶褐色土、砂質、粘性あり、しまりがよい
　炭化物焼土（5㎜～1㎝）を多く含む
5　茶褐色土、砂質、粘性あり、しまりがよい
　黄褐色の小ブロック（1㎝前後）を含む
　炭化物（1㎜）をごくわずかに含む
6　黒褐色土、砂質、粘性強－遺物出土層
　黄褐色土の小ブロック炭化物、焼土を含む－炭化物焼土は底の方に多い
6′6層に地山土（黄褐色土）が細かくまじる
7　暗黄褐色土、粘質土、粘性強
8　暗黄褐色土－地山の再堆積土
9　暗灰白色粘質土
10　暗茶褐色土、粘質土、粘性強
　炭化物、焼土（1㎜～5㎜）をわずかに含む

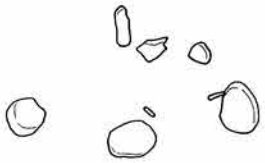


1　明茶褐色土に暗褐色土がわずかにまじりあう
1′明茶褐色土に暗褐色土がわずかにまじりあう
　炭化物と黄褐色土の細かい粒子がまじる
2　茶褐色土に暗褐色土がまじる
　黄褐色土の細かい粒子がまじる
　炭化物をごくわずかに含む
3　木の根のカクラン
4　基本層序のⅡ層、炭化物がごくわずかにまじる
5　暗褐色土、炭化物を多く含む
　黄褐色土、焼土をわずかに含む
6　茶褐色土、炭化物がまじる
7　暗茶褐色土に黄褐色土が細かく多量にまじる
　炭化物、焼土を含む
8　地山のくずれ、黄褐色土
9　茶褐色土に黄褐色土がまじる
　炭化物、焼土がまじる

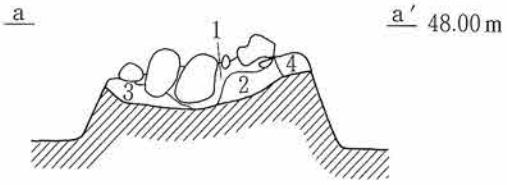
第5図　遺構実測図 1

集石41

集石42

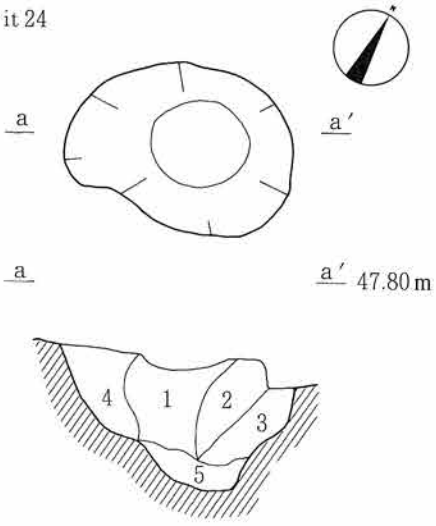


集石41



1　暗茶褐色土　炭化物をわずかに含む
2　茶褐色土　　炭化物を多く含む、焼土をごくわずかに含む
3　明茶褐色土　炭化物を多く含む、焼土をごくわずかに含む
4　木ノ根

Pit 24



1　暗茶褐色土しまりはよくない
　黄褐色土がわずかにまじる
2　暗黄茶褐色土、黄褐色土がまじる
　しまりがよい
3　暗茶褐色土
　黄褐色土と黒褐色土粒がわずかにまじる
4　暗褐色土、黄褐色土がまじる
5　暗灰褐色土粘性強い

砂質だが粘性強い

0　1 m
（1 : 20）

第6図　遺構実測図 2

第V章　遺　　物

1．縄文土器・土製品（第7・8図・図版4・5）

百塚東D遺跡から出土した遺物はすべて縄文時代のものである。縄文土器は早期・前期・中期・後期・晩期の各時期のものが出土している。しかし、量は少なく、土器はほとんどが細片で総数は438点である。各時期の内訳は早期3％、前期10％、中期10％、後晩期47％、時期不明の縄文土器30％となっており、後晩期が比較的多い。出土層位はⅡ・Ⅲ層を中心にしているが、層位的に区別はできない。また、遺構に伴った遺物はわずかである。細片でも時期がはっきりし、図化できるものはなるべく図示した。しかし、細片が多いため全体の器形・文様構成を復元できるものはほとんどなかった。報告はおおまかな時期別に行っている。

土製品としては土製円盤が2点出土している。

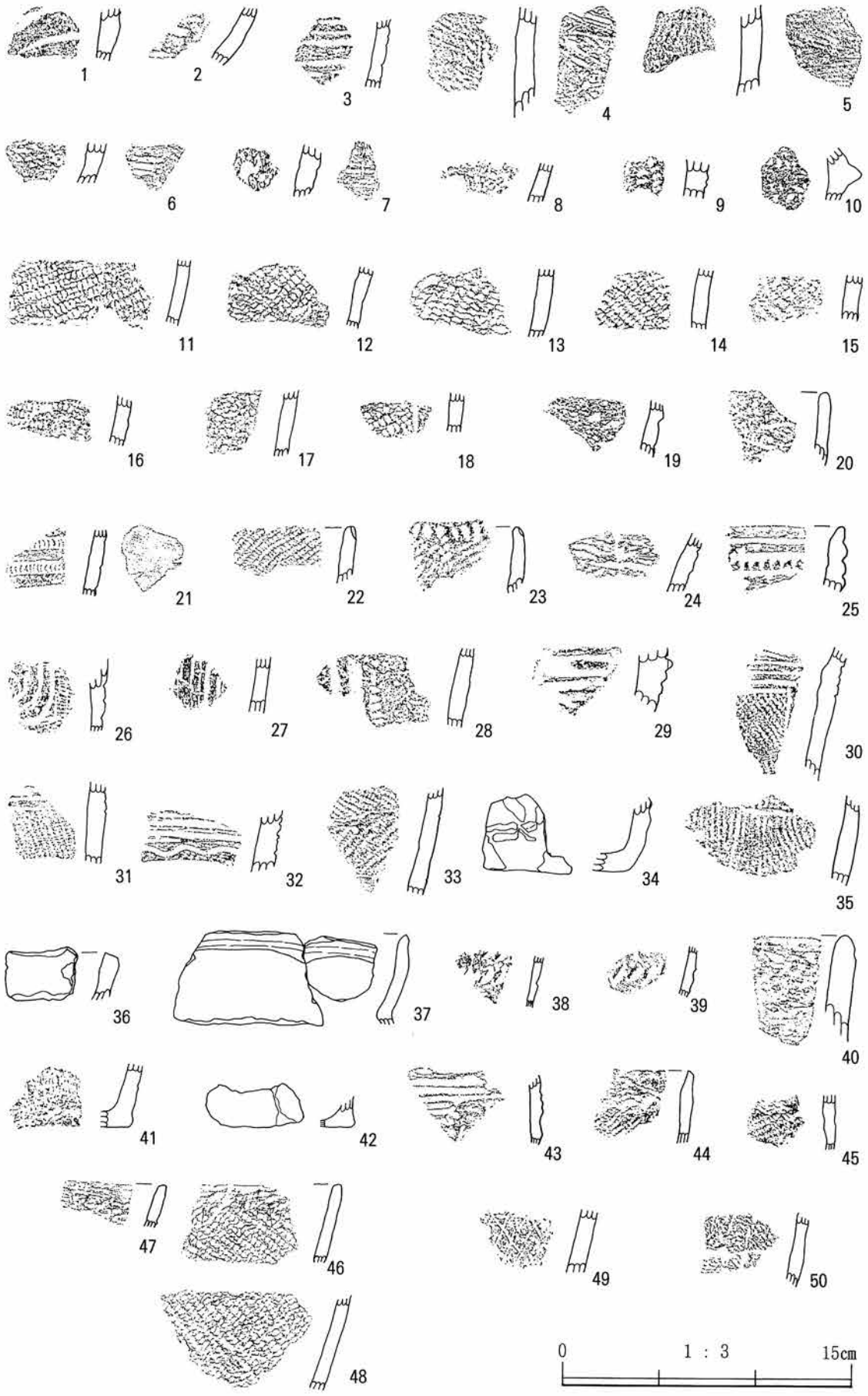
早期の土器（1～10）

1と2は同一個体である。金雲母を多く含み、繊維の混入も顕著である。丸棒状工具によって横位の平行沈線が描かれている。工具の使い方によって沈線の幅は3㎜から6㎜まで変化している。沈線の断面はゆるいU字状を呈している。外面の調整は丁寧である。3は横位の平行沈線文様である。沈線は半截竹管による可能性がある。繊維を含んでいる。1～3は縄文時代早期中葉の沈線文系の土器と考えられる。4～6までは同一個体である。外面は撚糸文で施文され、内面には条痕文が施される。条痕文の原体は絡条体の可能性がある。繊維は含まれるが焼成は良好である。早期の条痕文系土器群の中でも終末に位置すると考えられる。7は外面の施文は不明だが、内面に条痕文が施される。4～6と同じ時期のものと考えられる。8は爪形状の絡条体圧痕文が放射状を呈するように施文されている。内面の調整はナデのみである。繊維が多量に混入している。9・10は同一個体である。4㎜の絡条体圧痕文原体によって施文されている。粘土紐の貼付による隆帯が曲線で配され、絡条体圧痕が、弧状に施文されている他、隆帯両端にも絡条体圧痕が施される。内面には調整痕はない。4から10までは早期末葉の土器と考えられる。

前期の土器（11～24）

11～19は同一個体である。外面は撚の異なる2種類の原体を用いた非結束羽状縄文で施文され、内面は丁寧にナデられている。繊維が多量に混入され、他には石英が多く含まれている。外面は黒褐色、内面は暗褐色を呈する。11～19は前期初頭の花積下層式土器に並行すると考えられる。20は波状口縁を呈する深鉢で、文様は半截竹管による連続爪形文によって構成されている。内面の調整は丁寧である。21は半截竹管の押し引きによる連続爪形文である。多段に渡って交互に逆方向から施文され、無文部を挟んで文様を構成している。繊維を含み、断面はサンドイッチ状の色調を呈する。内外面共に調整は丁寧で特に内面はハケ状工具による横位の細かい条線が見える。22は口縁部で、斜位の縄文が施文されている。口唇部外面に縄文施文後の指頭痕があるが、装飾的効果をねらったものかどうかは細片のため不明である。23も口縁部で、斜位の縄文が施されている。口唇部外面には棒状工具によってわずかに傾いた縦位の連続する刺突が加えられている。内外面共に器壁があれている。24は繊維が多量に混入され、繊維痕が顕著なため外面の施文は不明である。20～24までは繊維を多量に含む前期前葉の黒浜式土器に並行する土器と考えられる。

1．縄文土器・土製品



第7図 縄文土器実測図 1

中期の土器（25～35）

25は深鉢の口縁部で口唇部内面がわずかに外反している。半截竹管を押し引きした平行する半隆起線文が施文されている。口唇部から3段目の半隆起線文上には同じ施文具による連続する横位の爪形文が施される。26は深鉢の胴部で半截竹管による半隆起線文によって、U字状に文様が描かれている。半隆起線文上には部分的に格子目状を呈する沈線文が描かれている。27も半截竹管による半隆起線文上に部分的に沈線文が描かれている。25～27は中期前葉、新崎式並行の土器で、半截竹管による半隆起線文による文様を特徴としている。28は深鉢の胴部で、粘土紐を貼付した隆帯の両脇に沈線が引かれている。これによって区画を作り、さらにその内側が棒状工具の押し引きによる連続爪形文が施文されている。中期前葉から中葉にかけての土器である。29は隆起線文を特徴とする中期中葉の土器である。30と31は口縁部から頸部にかけて平行する半隆起線文が施され、胴部には縄文を施文するキャリパー形の土器である。32は深鉢の頸部で縄文施文後に棒状工具による平行する沈線と波状を呈する沈線が描かれている。33は深鉢の底部である。底部は丸みをもって立ち上がり、底部付近に粘土紐の貼付隆帯による文様が確認できる。30から33は中期中葉の大木8ａ式に並行する土器である。34は胴部に結節の羽状縄文が多段にわたって施文される深鉢である。35は櫛状工具による細沈線が曲線状に施文されている。

後期の土器（36～42）

36は小さな波状口縁をもつ深鉢である。口唇部は平坦になっている。37は平縁口縁をもち、頸部がかなりくびれる深鉢である。口唇部は平坦で、口唇部外面に一条の沈線が巡っている。38・39は薄手の土器で表面が丁寧に調整されている。連続する爪形文が何段にもわたって平行に施文される。40は比較的厚めの土器で口唇部を尖らせている。口縁部外面に押圧による斜位の楕円文が巡っている。36から40は後期初頭の土器である。41は深鉢の底部で縦位の沈線が施文されている。42も小形の鉢の底部で底部付近は無文で緩やかなくの字状を呈している。

晩期の土器（43～48）

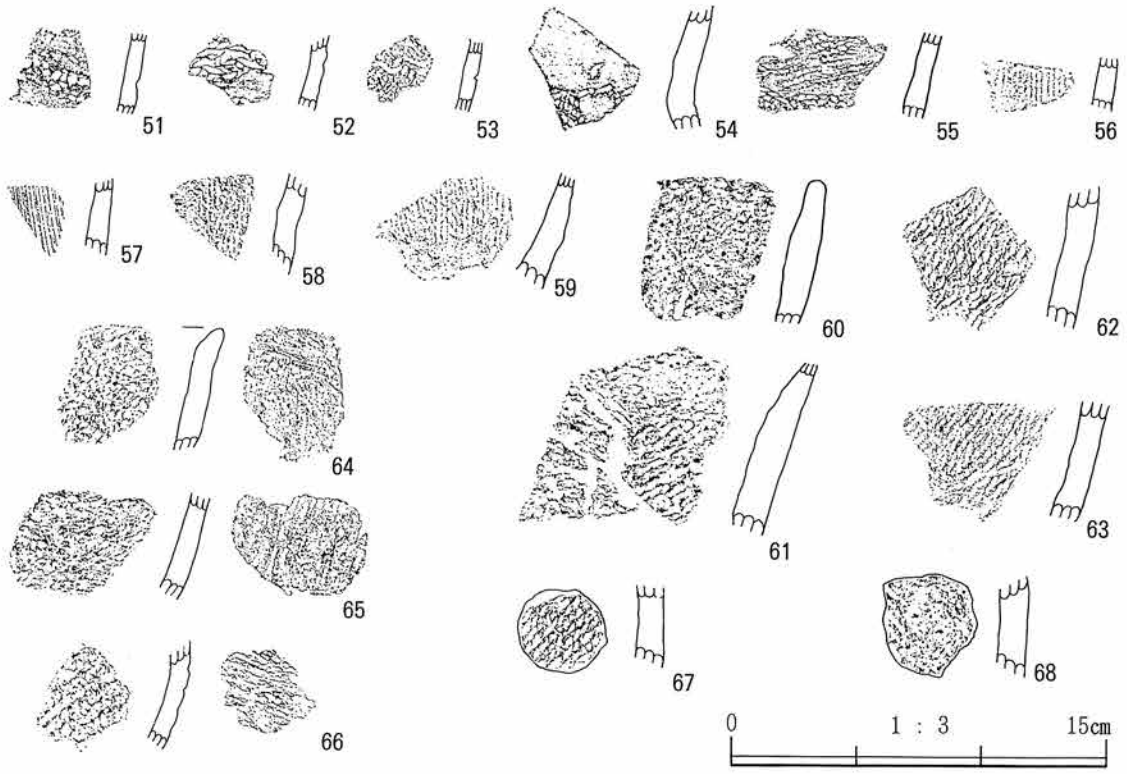
43は棒状工具によって、平行沈線や変型工字文が描かれる晩期後葉の土器である。44・45は同一個体で頸部に無文帯をもつ深鉢で、胴部は縄文を地文とし、綾繰文が横位に施文される。内面の調整が非常に丁寧である。46から48は同一個体で平縁口縁の深鉢である。縄文を地文とし、口縁部に綾繰文が施文される。

後期から晩期の土器（49～66）

49から66は後期から晩期にかけての土器である。文様に変化がなく、時期を分けることができないため、まとめて報告する。49・50は深鉢の胴部で網目状撚糸文が施されている。49は非常に細かい撚糸を使用している。51から55も深鉢の胴部で結節回転による綾繰文を伴う縄文が施文されている。56から58は櫛状工具による細沈線が施文されている。59から66は深鉢で胴部に撚糸文が施文されているものである。60・61は同一個体、62・63も同一個体で内外面共に調整は不良で砂礫を多く含む。64から66も同一個体である。撚糸文に縦方向の綾繰文が施される。口縁部内面には横方向の、胴部内面には縦方向の調整痕がはっきりと残っている。

土製品（67・68）

縄文時代の土製円盤が2点出土している。使用方法は不明である。67・68共に撚糸文がみられる土器片を転用した土製円盤である。67は丁寧に打ち欠かれ、円形に近いが、68は整形が不良で、不整円形である。



第８図　縄文土器実測図２・土製品実測図

２．石　　器（第９～12図・図版６～８）

発掘調査で出土した石器類はすべて縄文時代の石器であるが、土器と共に出土しているものが少ないため、時期を限定することは難しい。遺構の覆土中から出土しているものも数点あるが、遺構の性格・時期等も明確でないものが多いことから時期は不明なものが多い。また、剥片類が多数を占め、製品はわずかである。ここでは出土した石器類を選別・分類し、器種が明確なものについてはできるだけ図化し、観察表を作成した。

石　鏃（１・２）出土数は二点である。１、２とも頁岩製でいわゆる凹基無茎石鏃である。二点とも基部の抉入は浅く、２は先端が欠損している。

ピエス＝エスキーユ（３・４）ピエス＝エスキーユは楔形石器とも呼ばれるものである。２～３㎝前後の小型の剥片で平面形は四辺形を基本としているが、剥離が進むと三角形や紡錘形を呈するものもあり、向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になって認められる（両極剥離痕）ものを言う。３は長さ５㎝とやや大きめであるが、剥離が進み、縁辺が破損して不定形である。４個２対の両極剥離痕をもっている。４はほぼ正方形の小型剥片で、２個１対の両極剥離痕をもっている。刃部は風化が著しいが、微細剥離が認められる。

打製石斧（５・６）５は横長剥片を素材としており、平面形は刃部幅が基部幅のおよそ1.5倍になる撥型になっており、数少ない完形品である。二次加工は両面に施されているが側縁部はツブシの加工が施されている。表面は、礫表皮を多く残しており、裏面の剥離は風化が著しい。刃部は円刃の片刃で微細剥離が見られる。６は基部を欠損しているが残存部の形から、平面形は短冊型と推定される。二次加工は両面に施されているが、比較的浅い角度の剥離である。刃部は中央がやや突出した円刃の両刃である。

第2表 縄文土器・土製品観察表

番号	出土地点・層位	器種	厚さ(cm)	時期	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
1	8 B 20 Ⅱ層	深鉢	0.8	早期中葉 沈線文系	沈線 断面ゆるいU字状 外面の調整丁寧 光沢あり	金雲母 繊維	茶褐色		同一個体
2	9 B 21 Ⅱ層	深鉢	1.0	早期中葉 沈線文系	〃	〃	〃		
3	6 B 8 Ⅲ層	深鉢	0.75	早期中葉 沈線文系	平行沈線 断面U字状 内面の調整が丁寧	粗い砂粒 繊維	橙色	内面にススが付着	
4	9 B 15 Ⅱ層	深鉢	1.0	早期末葉 条痕文系	外面撚糸 内面条痕 原体は絡条体か	小礫 繊維	外面橙色 内面暗褐色	内面にスス・炭化物が付着	同一個体
5	9 B 15 Ⅱ層	深鉢	1.0	早期末葉 条痕文系	〃	〃	〃	〃	
6	9 B 20 Ⅱ層	深鉢	0.9	早期末葉 条痕文系	〃	〃	〃	〃	
7	10 B 16 Ⅲ層	深鉢	0.9	早期末葉 条痕文系	外面施文不明 内面条痕文	小礫 繊維	橙色	内面に炭化物が付着	
8	5 B 16 Ⅲ層	深鉢	0.6	早期末葉 絡条体圧痕文系	爪形状の絡条体圧痕文が放射状に広がる	繊維	橙色		
9	5 B 8 Ⅲ層	深鉢	1.15	早期末葉 絡条体圧痕文系	4㎜の原体による絡条体圧痕文爪を描く	繊維	外面橙色 内面灰褐色		同一個体
10	5 B 9	深鉢	0.9	早期末葉 絡条体圧痕文系	外面粘土紐貼り付けによる隆帯 隆帯両端に刺突が施されている	繊維	外面橙色 内面暗灰色		
11	6 B 13 Ⅲ層	深鉢	0.55	前期初頭 花積下層式並行	外面羽状縄文（横位非結束） 内面調整が丁寧	石英 繊維	外面黒褐色 内面暗褐色		6 B 18Ⅲ層と接合
12	6 B 19	深鉢	0.6	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
13	6 B 14	深鉢	0.6	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
14	6 B 19 Ⅲ層	深鉢	0.6	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
15	6 B 19 Ⅲ層	深鉢	0.7	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
16	6 B 18 Ⅲ層	深鉢	0.6	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		同一個体
17	6 B 19	深鉢	0.7	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
18	6 B 19 Ⅲ層	深鉢	0.6	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
19	6 B 19	深鉢	0.7	前期初頭 花積下層式並行	〃	〃	〃		
20	4 B 15 Ⅲ層	深鉢 (口縁部)	0.6 推定口径 30	前期 黒浜式並行	外面半截竹管による連続爪形文 内面調整丁寧／波状口縁	繊維	橙色		
21	5 B 16 Ⅲ層	深鉢	0.7	前期 黒浜式並行	外面半截竹管の押引きによる連続爪形文 内面調整丁寧 擦痕が顕著	繊維	橙色 内面暗茶褐色		
22	7 B 1 Ⅱ層	深鉢 (口縁部)	0.7 推定口径 37	前期	外面斜位の縄文施文 口縁外面指頭痕あり	繊維	外面暗褐色 内面灰橙色	外面にスス炭化物付着	
23	9 B 23 Ⅱ層	深鉢 (口縁部)	0.8 推定口径 15	前期	外面斜位の縄文施文 口縁部に棒状工具による連続刺突あり	繊維	橙色		
24	4 B 15 Ⅲ層	深鉢	0.65	前期 黒浜式並行	外面施文不明	粗い砂粒 繊維	外面暗赤褐色 内面橙色		外面繊維痕顕著
25	10 B 23 Ⅲ層	深鉢 (口縁部)	0.85 推定口径 25	中期前葉 新崎式並行	外面半隆起線文 半截竹管による連続爪形文 口唇部内面わずかに外反する	胎土精良 混入物少	灰褐色	外面炭化物付着	
26	4 B 19 Ⅱ層	深鉢	0.7	中期前葉 新崎式並行	外面半隆起線文 格子目状の沈線	わずかに砂礫	外面橙色 内面黒褐色		
27	9 B 10 Ⅲ層	深鉢	0.7	中期前葉 新崎式並行	外面半隆起線文 半隆起線文上に沈線で格子目文が描かれる	白色小粒子 わずかに砂礫	灰橙色	内面にわずかにススが付着	
28	10 B 7 Ⅱ層	深鉢	0.7	中期前葉～中葉	貼付隆帯の両脇に沈線 棒状工具の押引による連続爪形文 内面調整丁寧	砂礫多	暗橙色		
29	4 A 24 Ⅲ層	深鉢	1.0	中期中葉	貼付隆帯と半隆起線文	砂礫多	淡橙色		
30	10 B 7 Ⅱ層	深鉢	0.8	中期中葉 大木8a式並行	縄文地文 半截竹管による半隆起線文		外面橙色		
31	10 B 23 Ⅲ層	深鉢	0.9	中期中葉 大木8a式並行	縄文地文 半截竹管による半隆起線文	胎土精良	橙色		
32	4 B 5 Ⅲ層	深鉢	1.15	中期中葉 大木8a式並行	縄文施文後に棒状工具による沈線	砂礫	橙色		
33	10 B 11 Ⅲ層	深鉢 底部	0.75	中期中葉	貼付隆帯による文様が確認できる 底部から丸味をもってたちあがる	砂礫多	内面にわずかにススが付着		
34	9 B 21 Ⅱ層	深鉢	0.75	中期	結節の羽状縄文	砂礫多	橙色		内面ナデによる砂礫の動いた痕跡が顕著

1．縄文土器・土製品

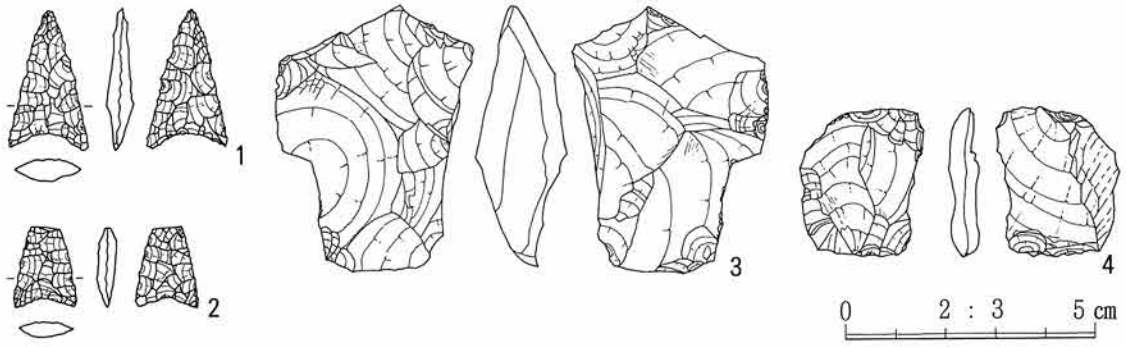
番号	出土地点・層位	器種	厚さ(cm)	時期	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
35	7 B 1 Ⅱ層	深鉢	0.7	中期	櫛状工具による細沈線 曲線状を呈する	精良 砂多	橙色		
36	1 A 22 Ⅲ層	深鉢 (口縁部)	0.7／推定 口径 11.5	後期初頭	波状口縁　口唇部が平坦になる 無文　内外面の調整丁寧	精良	橙色		
37	1 B 19 Ⅱ層	深鉢 (口縁部)	0.7／推定 口径 18.0	後期初頭	平縁口縁　口唇部が平坦　口唇部外面に棒状工具による一条の沈線	砂礫多	橙色 口唇部のみ灰褐色		1 B24Ⅱ層と接合
38	1 B 17	深鉢	0.4	後期初頭	爪形文の連続刺突（平行）	胎土精良 混入物少	淡橙色		同一個体
39	1 B 17	深鉢	0.4	後期初頭	〃	〃	〃		
40	4 A 25 Ⅲ層	深鉢 (口縁部)	1.4／推定 口径 41.0	後期初頭	口唇部が尖る　口縁外面に斜めの楕円文が巡る　外面調整不良	砂礫	橙色		
41	9 B 9 Ⅱ層	深鉢 (底部)	0.7／推定 底部径 9.0	後期	縦位の沈線　外面調整不良	白色小粒子／砂礫	暗橙色		
42	5 B 6 集石41	深鉢 (底部)	0.55／推定 底部径 7.0	後期	無文　底部付近が緩やかなくの字状を呈する	白色小粒子／砂礫	暗灰褐色	内外面に炭化物が付着	
43	8 A 22 SX6	鉢	0.45	晩期後葉	平行沈線　変型工字文 棒状工具	粗い砂	暗灰褐色	外面に炭化物が付着	
44	5 A 22 溝・攪乱	深鉢	0.55	晩期	頸部に無文　綾繰文　縄文内面の調整丁寧	砂礫多	暗灰褐色	外面に炭化物付着	同一個体
45	5 A 22 溝・攪乱	深鉢	0.55	晩期	〃	〃	〃	〃	
46	4 A 20 Ⅲ層	深鉢 口縁部	0.6	晩期	平縁口縁　口縁部に綾繰文（結節回転）に縄文	胎土精良 砂礫	淡橙色	外面に炭化物スス付着	
47	5 A 16 Ⅲ層	深鉢 口縁部	0.6	晩期	〃	〃	〃	〃	同一個体
48	5 A 16 Ⅲ層	深鉢 口縁部	0.6	晩期	〃	〃	〃	〃	
49	5 B 17 集石42	深鉢	0.8	後期～ 晩期	網目状撚糸文　非常に細い撚糸使用	砂礫	外面灰橙色 内面暗褐色	内面にスス付着	
50	6 B 4 Ⅲ層	深鉢	0.55	後期～ 晩期	網目状撚糸文	砂礫多	橙色	外面に炭化物付着	
51	4 A 17 Ⅲ層	深鉢	0.7	後期～ 晩期	綾繰文（結節回転） 内外面の調整丁寧	白色小粒子／砂礫	外面灰褐色 内面橙色		
52	5 A 22	深鉢	0.6	後期～ 晩期	綾繰文（結節回転）撚りがよくみえる 内外面の調整丁寧	砂礫	灰橙色		
53	8 A 22 SX－6	深鉢	0.5	後期～ 晩期	撚糸文に綾繰文（結節回転） 内外面の調整丁寧	砂礫	橙色		
54	9 B 北側確認トレンチ	深鉢	0.9	後期～ 晩期	綾繰文（結節回転）に縄文 内外面の調整丁寧	胎土精良 白色小粒子	灰橙色		
55	4 A 17 Ⅲ層	深鉢	0.9	後期～ 晩期	綾繰文（結節回転）に縄文	胎土精良 砂	灰橙色		
56	6 A 25 P24	深鉢	0.8	後期～ 晩期	櫛状工具による細沈線 内外面の調整丁寧	白色小粒子／砂礫	灰橙色		同一個体
57	6 A 25 P24上層	深鉢	0.65	後期～ 晩期	〃	〃	〃		
58	6 A 20 Ⅲ層	深鉢	0.8	後期～ 晩期	櫛状工具による細沈線	白色小粒子／砂礫	灰橙色		
59	SX2	深鉢	0.7	後期～ 晩期	撚糸文 内外面調整不良　底部に近い部分	砂礫多	橙色		
60	5 B 15 Ⅲ層	深鉢	1.1	後期～ 晩期	撚糸文　粗製 内外面調整不良	砂礫多	橙色	外面に炭化物付着	同一個体
61	5 B 15 Ⅲ層	深鉢	1.1	後期～ 晩期	〃	〃	〃	〃	
62	6 B 11 Ⅲ層	深鉢	1.0	後期～ 晩期	撚糸文　粗製 内外面の調整不良	砂礫多	橙色	外面に炭化物付着	同一個体
63	6 B 11	深鉢	1.0	後期～ 晩期	〃	〃	〃	〃	
64	10 B 7 Ⅱ層	深鉢 (口縁部)	0.7／推定 口径 31.0	後期～ 晩期	撚糸文　縦方向の綾繰文（結節回転） 口縁部内面横方向の調整痕		外面　橙色 内面灰橙色	内外面に炭化物付着	
65	10 B 7 Ⅱ層	深鉢 (口縁部)	0.7／推定 口径 31.0	後期～ 晩期	胴部裏面縦方向の調整痕が顕著に残る		〃	特に内面顕著	同一個体
66	10 B 7 Ⅱ層	深鉢 (口縁部)	0.7／推定 口径 31.0	後期～ 晩期	〃		〃	〃	
67	6 B 11 Ⅲ層	土製 円盤	1.0	時期不明	撚糸文／土器片を利用 丁寧に打ち欠き、円に近い	砂礫多	灰橙色		
68	4 A 25 Ⅲ層	土製 円盤	1.0	時期不明	撚糸文／土器片を利用 打ち欠きが不良、不整円形	精良 混入物有	灰橙色		

磨製石斧（7～10）7は定角式磨製石斧である。幅は5.4cmだが基部が欠損しているため、全体の長さは不明である。刃部は両刃の円刃で微細剥離と線条痕が見られる。8は定角式磨製石斧である。刃部から2cm程しか残っていないため、全体は不明である。刃部は両刃の円刃で微細剥離と線条痕が見られる。9はＳＫ－３出土の砂岩製の磨製石斧で完形品である。小型の礫を使用し、大まかな剥離により形状を整え、その後部分的に研磨している。裏面には横方向からの大きな剥離面が見られる。側縁部の研磨はわずかで、角度も緩やかである。刃部は片刃の偏刃で微細剥離と線条痕が見られる。形態的には早期に属する可能性がある。10は定角式磨製石斧である。右側縁部3.5cm刃部2.5cm程しか残っていないため全体は不明である。刃部は両刃の円刃で微細剥離と線条痕が見られる。

不定形石器（11～20）剥片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でないものを不定形石器とした。11は両面加工石器である。極めて厚手の横長剥片を素材としており、二次加工は比較的大型の剥離を両面に施しているが均等ではない。12はＳＫ－３出土の剥片石器である。縦長剥片を素材としており、刃部は内側に丸みをもつ。13は上端が欠損しているため素材は不明である。正面左側縁部に微細剥離が見られる。14はやや厚手の縦長剥片を素材とし、刃部はかなり鋭くなっている。15は横長剥片を素材としており、正面左側縁部に擦痕が認められる。一部礫表皮が残っている。16は風倒木痕から出土の剥片石器である。基部が破損しているが横長剥片を素材としており、端部は二次加工が施され平面形は波状になっている。17は風倒木痕52出土の剥片石器である。薄手の縦長剥片を素材とし、縁辺の一部に背面側からのみ細かい剥離を不連続に行って調整している。18はＳＸ－43出土の鋸歯縁石器である。やや厚手の縦長剥片を素材としており、裏面右側縁部に鋸歯状の剥離が施されている。19は縦長剥片を素材とした小型の剥片石器である。20はＳＸ－43出土で薄手の縦長剥片を素材とし、二次加工を側縁部の狭い範囲に連続的に行っている。

磨　石（21～27）21は使用面は側面一箇所で磨面はザラザラしており、風化が著しい。22は使用面は側面一箇所で磨面はややザラザラしている。23は使用面は両側面であり、磨面はやや滑らかであるが風化が著しい。24はＳＸ－２出土の磨石である。正・裏面と側面一箇所の三面を使用しており、磨面はザラザラしている。25は使用面は側面一箇所で磨面は滑らかであり、上端が一部剥落している。26は安山岩製の磨石で、使用面は一側面で磨面はやや滑らかである。一部破損している。27は使用面は一面で磨面は滑らかである。これらの磨石に敲打痕はまったく見られない。

凹　石（28）安山岩製の凹石である。正・裏面に敲打による凹凸がある。器面は荒れており、風化も著しい。敲打面の凹痕は深く中央部に多い。磨痕はまったく見られない。



第9図　石器実測図 1

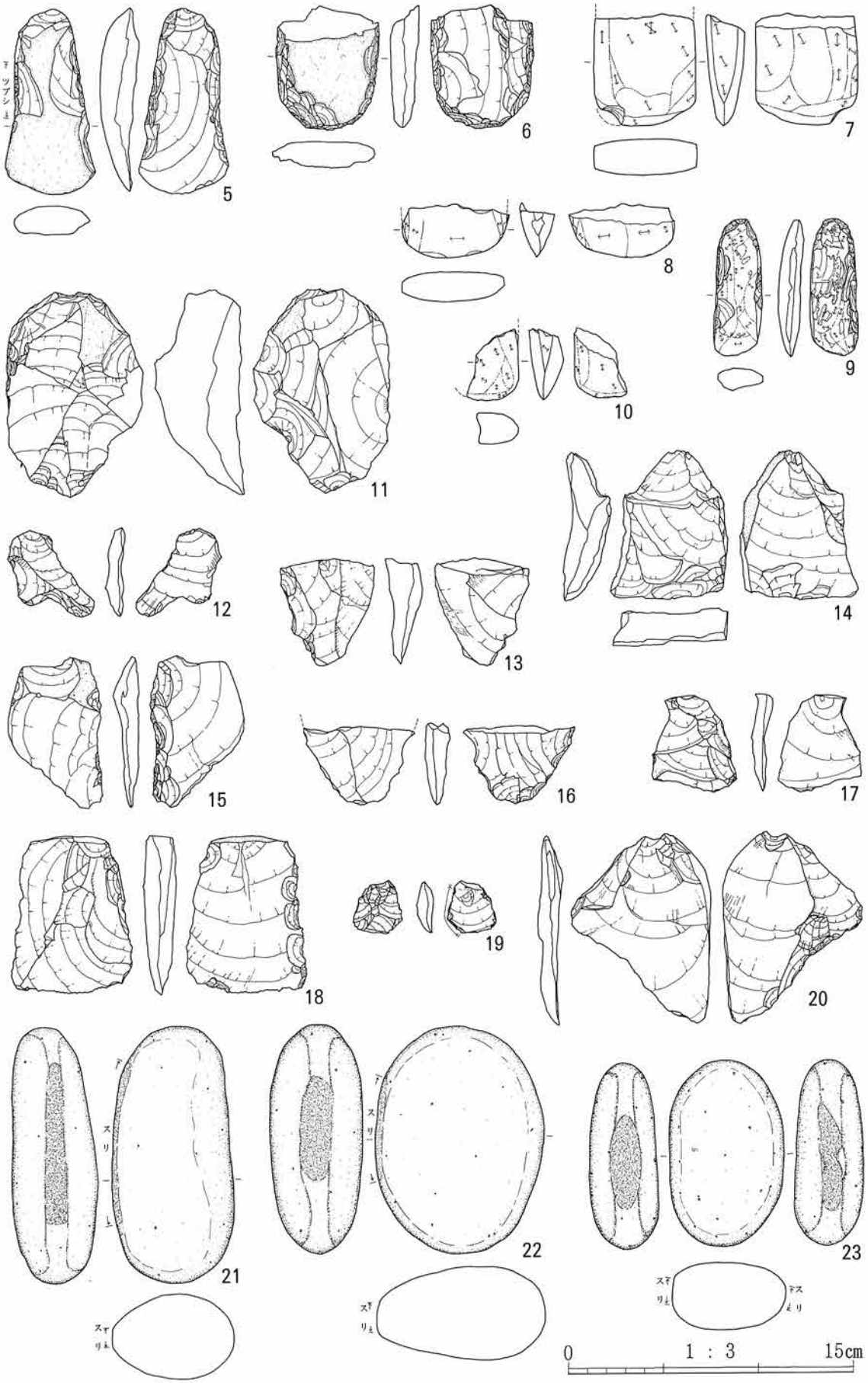
2．石　　器

石　錘（29～35）石錘は漁撈具の漁網用の錘、あるいは編み物用の錘として使用されたと言われている石器である。出土した石錘はすべて礫石錘であり、円形偏平の安山岩を多く使用し極めて大型である。29～33・35は長軸の端部を打ち欠いて網掛け部を作り出している。34のみ短軸の側縁を打ち欠いて網掛け部を作り出しているものである。29は破損した石錘の割れ口を打ち欠いて網掛け部を作り出して、再度使用したものらしい。破損前の大きさは長さ14.0cm前後、重さ800ｇ前後と推定される。32は唯一のホルンフェルス製の石錘である。出土した石錘の中では最小であり、他の大型石錘とは用途が異なるようである。35は重さ1300ｇを測り最大である。

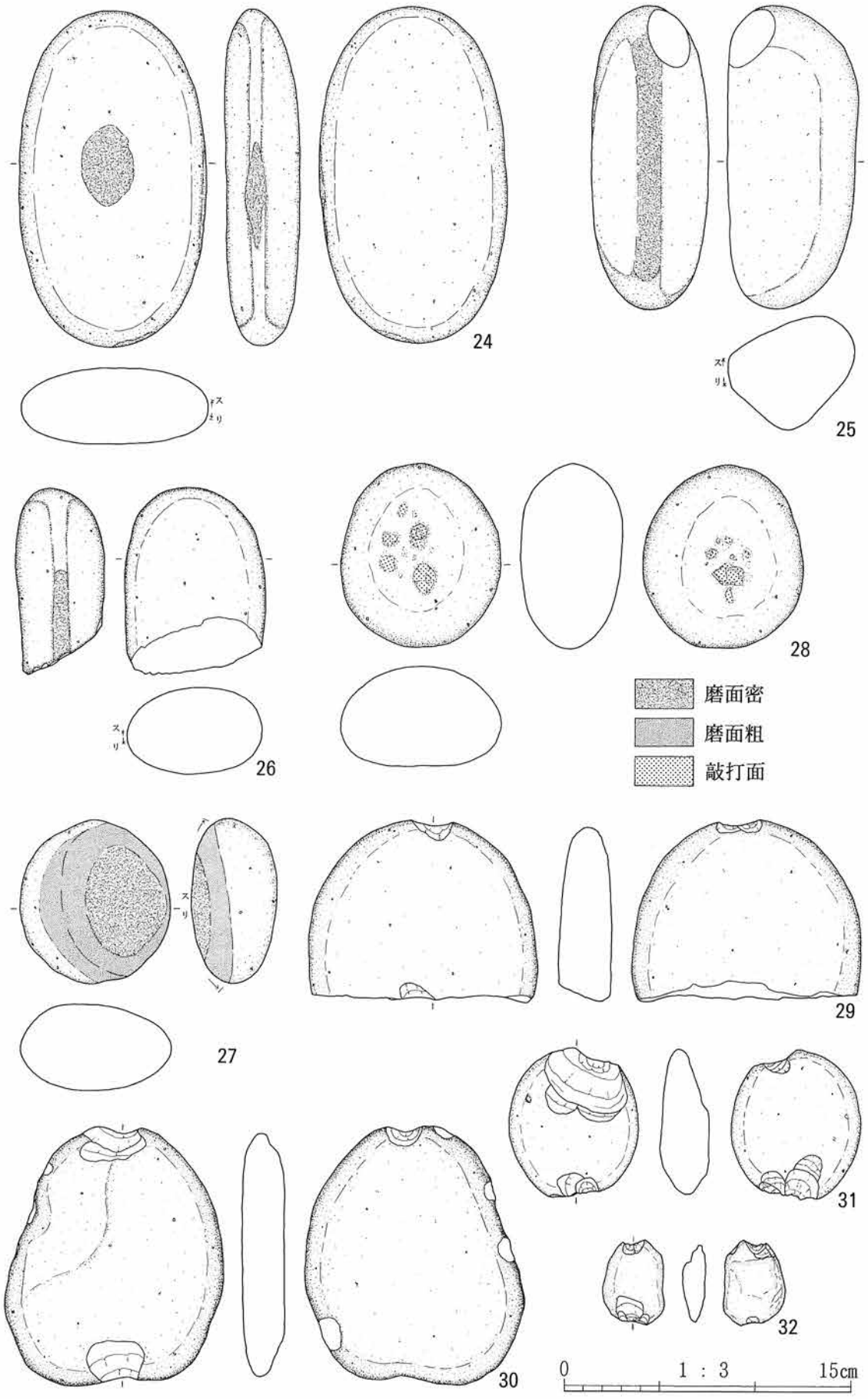
石　核（36・37）石核の二点は剥片剥離作業を行い、剥片を得た残りの部分（残核）である。36は旧剥離面を打面として剥片剥離作業を行っている。37は打点が打面の周縁に移動しながら、剥片剥離作業を行っている。また、剥離方向を90度変えて小剥離作業を右縁辺部に行っている。

第3表　石　器　観　察　表

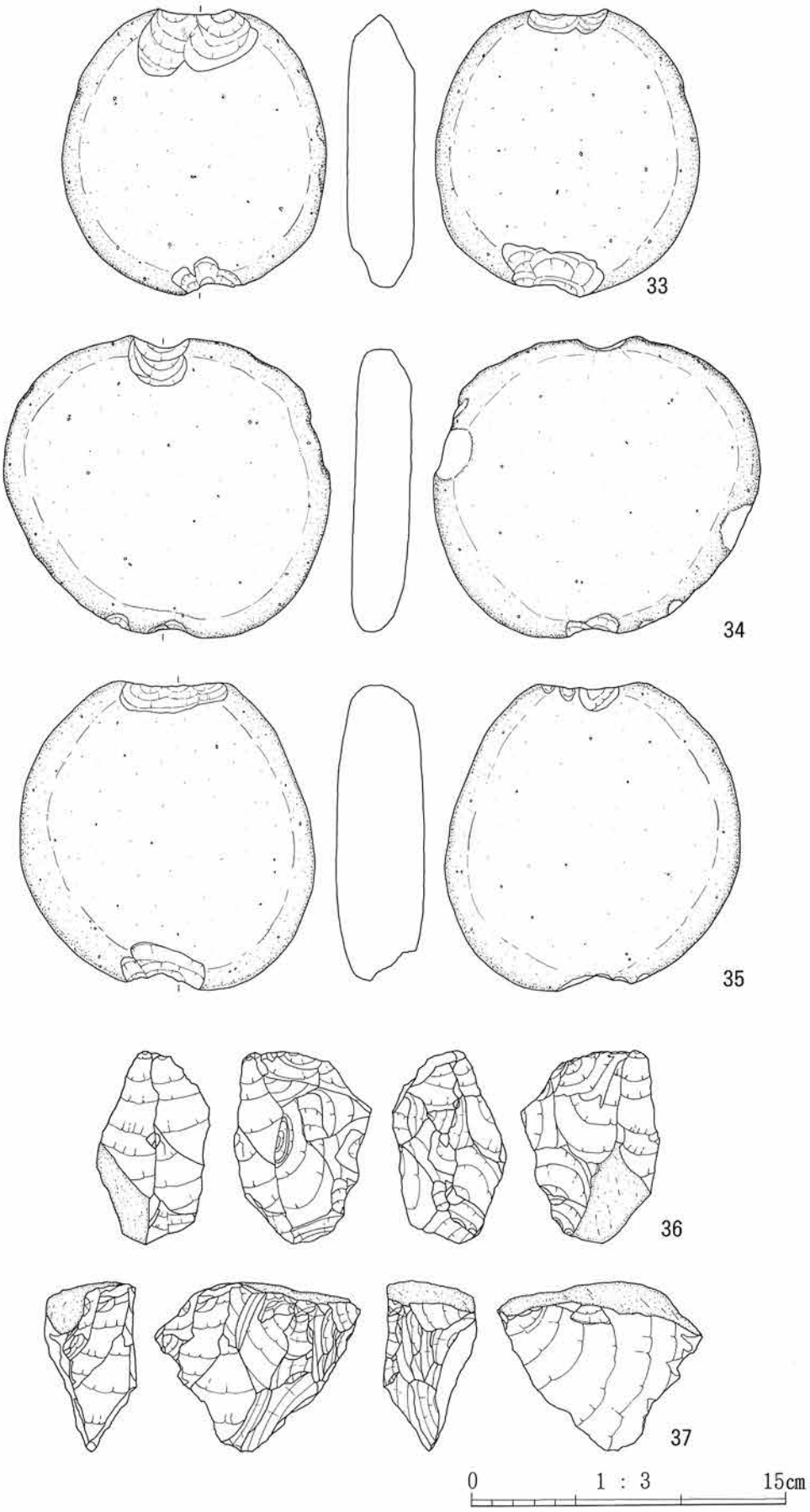
図No.	出土地点・層位	器　種	長	幅	厚cm	重さg	石　材	備　考
1	6－A－16・Ⅳ層	石　鏃	2.3	1.6	0.5	1.2	頁　岩	
2	9－B北側トレンチ	石　鏃	1.6	1.2	0.3	0.6	頁　岩	
3	10－B－7・Ⅱ層	ピエス＝エスキーユ	10.6	7.9	1.8	27.2	頁　岩	
4	5－B－6・Ⅱ層	ピエス＝エスキーユ	5.9	5.0	0.3	3.4	凝灰岩	
5	5－B－7・Ⅲ層	打製石斧	9.6	4.8	2.2	80.1	泥　岩	
6	4－A－17・Ⅱ層	打製石斧	6.5	5.5	1.6	59.1	粘板岩	
7	2－C－2・Ⅲ層	磨製石斧	5.9	5.4	2.0	98.7	蛇紋岩	
8	4－A－20・Ⅲ層	磨製石斧	2.9	5.7	1.9	24.4	砂　岩	SX－43
9	9－B－8	磨製石斧	7.1	2.5	1.2	98.7	砂　岩	SK－3
10	9－B－24・Ⅲ層	磨製石斧	3.5	2.5	1.7	17.1	蛇紋岩	
11	4－A－24・Ⅲ層	不定形石器	10.8	7.3	4.4	303.1	ガラス質安山岩	横長剥片
12	9－B－8	不定形石器	4.6	4.7	1.0	12.6	ガラス質安山岩	SK－3　縦長剥片
13	9－B～19・Ⅱ層	不定形石器	5.6	5.0	1.9	39.7	凝灰岩	
14	4－B－10・Ⅲ層	不定形石器	7.9	6.2	2.0	105.7	ガラス質安山岩	縦長剥片
15	6－B－19・Ⅱ層	不定形石器	7.9	5.0	1.4	38.0	凝灰岩	横長剥片
16	10－C－2	不定形石器	4.2	5.9	1.3	24.4	ガラス質安山岩	風倒木痕　横長剥片
17	1－B－7	不定形石器	5.2	4.5	0.7	13.0	頁　岩	風倒木痕52縦長剥片
18	4－A－20	不定形石器	8.2	6.4	1.7	99.4	ガラス質安山岩	SX－43　縦長剥片
19	10－B－17・Ⅱ層	不定形石器	2.8	2.6	0.9	5.2	硬質頁岩	縦長剥片
20	4－A－20	不定形石器	9.9	7.4	1.1	80.2	硬質頁岩	縦長剥片
21	5－B－19・Ⅲ層	磨　石	13.4	6.4	4.5	572.7	安山岩	
22	5－B－7・Ⅲ層	磨　石	12.0	8.9	4.9	698.5	安山岩	
23	9－B－21・Ⅱ層	磨　石	9.7	6.0	3.5	25.1	安山岩	
24	8－A－2	磨　石	17.4	9.7	3.9	1001.2	安山岩	SX－2
25	6－B－17・Ⅲ層	磨　石	15.7	6.6	6.1	960.6	砂　岩	
26	9－B－23・Ⅱ層	磨　石	9.4	7.3	4.5	457.0	安山岩	
27	3－B－13・Ⅲ層	磨　石	8.6	7.9	4.5	375.2	安山岩	
28	9－B－23・Ⅱ層	凹　石	9.5	8.3	5.3	526.6	安山岩	
29	5－B－24・Ⅱ層	石　錘	9.0	11.6	2.8	490.0	安山岩	
30	5－A－18・ⅢⅣ層	石　錘	13.2	11.2	2.2	550.0	安山岩	
31	10－B－11・Ⅱ層	石　錘	7.7	6.7	2.5	163.0	安山岩	
32	2－A－22・Ⅲ層	石　錘	4.4	3.1	1.1	24.1	ホルンフェルス	
33	7－B－20・Ⅱ層	石　錘	13.2	12.5	3.3	880.0	安山岩	SX－43
34	5－A－18・ⅢⅣ層	石　錘	14.2	15.5	2.6	1010.0	安山岩	
35	2－A－22・Ⅲ層	石　錘	14.7	14.0	4.1	1300.0	安山岩	
36	5－A－17・Ⅲ層	石　核	9.2	6.5	5.5	265.7	ガラス質安山岩	
37	4－B－10・Ⅲ層	石　核	8.1	9.7	4.5	293.5	ガラス質安山岩	



第10図　石器実測図 2



第11図　石器実測図 3



第12図　石 器 実 測 図 4

第Ⅳ章　ま　　と　　め

百塚東Ｄ遺跡は小千谷市の信濃川中流域の段丘面、小千谷面に位置している。この面は非常に多くの縄文時代の遺跡が存在していることで知られている。当遺跡の地形はわずかにくぼんでいる部分もあるが、ほぼ平坦で、検出された遺構に住居跡等はなく、土坑・集石のみであり、遺跡の中心からはずれた縁辺部にあたると考えられる。遺跡の中心は地形から考えると、調査区域の南側の信濃川に向かってわずかに高くなっている区域にある可能性がある。

縄文時代各期の遺物が出土しているが、１km程離れた同一段丘面上に位置する縄文後期の集落跡、三仏生遺跡との関わりを示す三仏生式土器は、ほとんど出土しなかった。早期・前期・中期・後期・晩期と少量ずつの出土で、まとまりに欠けており、中心となる時期は特定しがたいが、後・晩期が比較的多いようである。こうした縄文時代各期の遺物の出土が見られることが、当遺跡の一つの特徴と考えられ、縄文時代を通じて、恵まれた環境にあったことがうかがわれる。また、地形的にも大河、信濃川に近く、大形の石錘が魚網に使われた可能性もあることから、生産活動の場としてとらえることもできる。

最後に検討事項として、早期の遺物が少量ながら出土し、草創期の遺物が存在する可能性もあることから［佐藤ほか1993］今後も、確認調査方法等に留意していく必要がある。

引用・参考文献

エ　遠藤　佐ほか　1987　『徳右ヱ門山遺跡』新潟県小千谷市教育委員会

オ　岡村道雄　1983　「ピエス＝エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究７』雄山閣出版

キ　北村　亮ほか　1990　「岩原Ｉ遺跡・上林塚遺跡」『関越自動車道関係発掘調査報告書』新潟県教育委員会

　　1994　「新潟県における縄文早期末・前期初頭の土器様相」『第７回縄文セミナー早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

ク　國島　聡　1990　「後期初頭・前葉の土器群」『第４回縄文セミナー縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会

サ　佐藤雅一ほか　1993　「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム１　環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟大会実行委員会

　　佐藤政英ほか　1982　「百塚」『三仏生のあゆみ』新潟県小千谷市三仏生地区

ス　鈴木道之助　1991　『図録　石器入門事典　縄文』柏書房

タ　田中耕作　1985　『北平Ｂ遺跡・岡塚遺跡範囲確認調査報告書』新潟県新発田市教育委員会

ナ　中村孝三郎ほか　1957　『三仏生』新潟県長岡市立科学博物館

ニ　日本の地質（中部地方Ｉ）編集委員会　1988　『日本の地質４　中部地方Ｉ』㈱共立出版東京

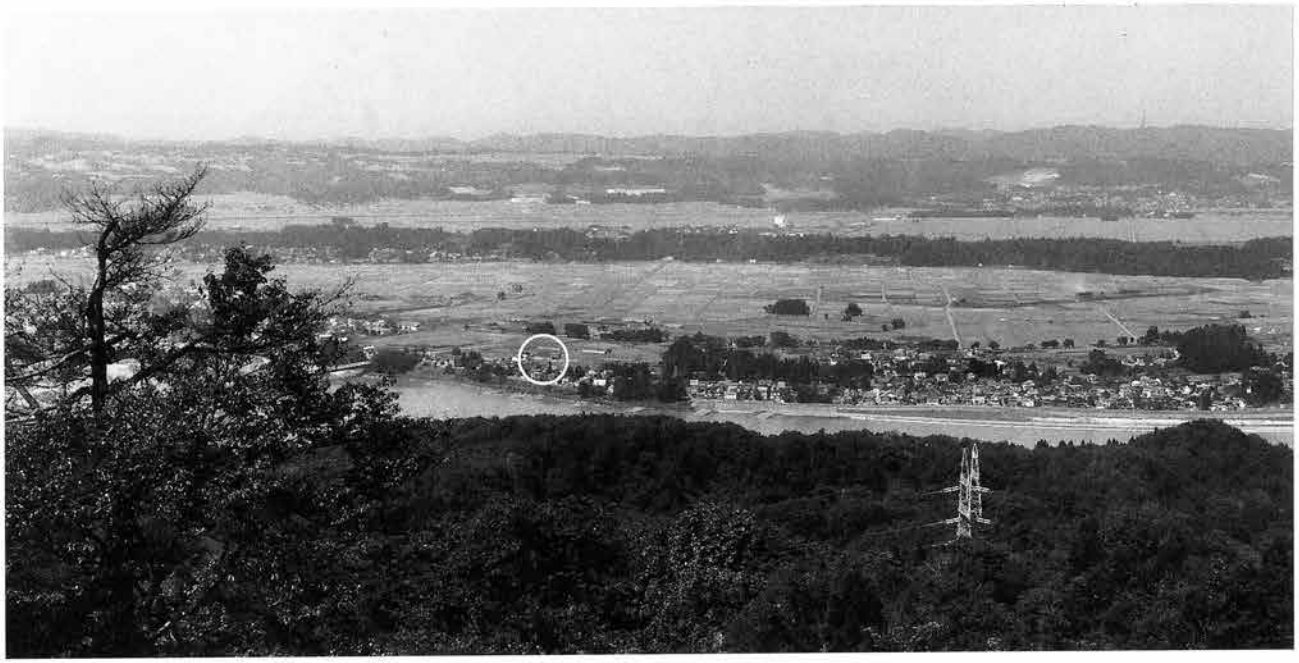
フ　藤巻正信ほか　1991　『城之腰遺跡』新潟県教育委員会

ヨ　吉越正勝ほか　1992　『大地から学ぶ越路町のおいたち（Ｘ）』新潟第四紀グループ

ワ　綿田弘実ほか　1993　「向六工遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12』長野県教育委員会

　　渡邊朋和　1992　「新潟県における縄文時代晩期初頭～中葉の土器群」『第５回縄文セミナー縄文晩期の諸問題』縄文セミナーの会

図　　版



調査区遠景（朝日山頂上から）

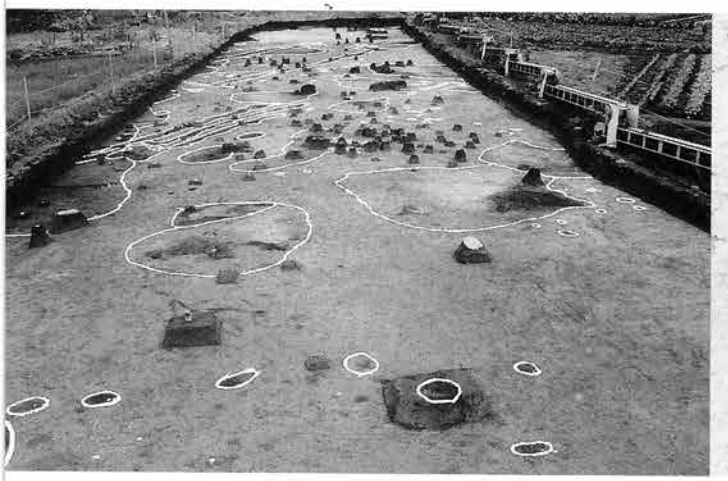
完　　掘　　状　　況

完掘後漸移層地山確認状況

図版 2

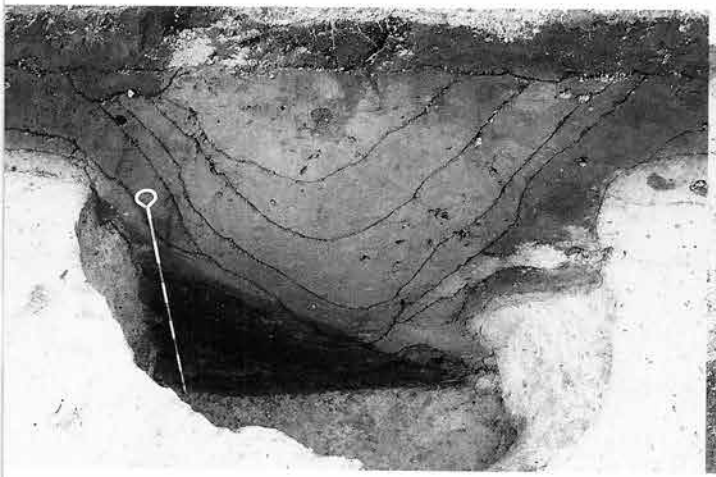
基本土層断面

包含層遺物出土状況

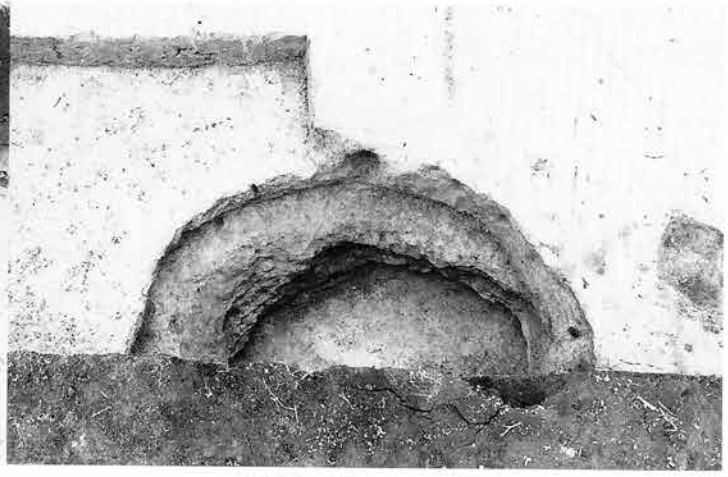


遺構確認状況

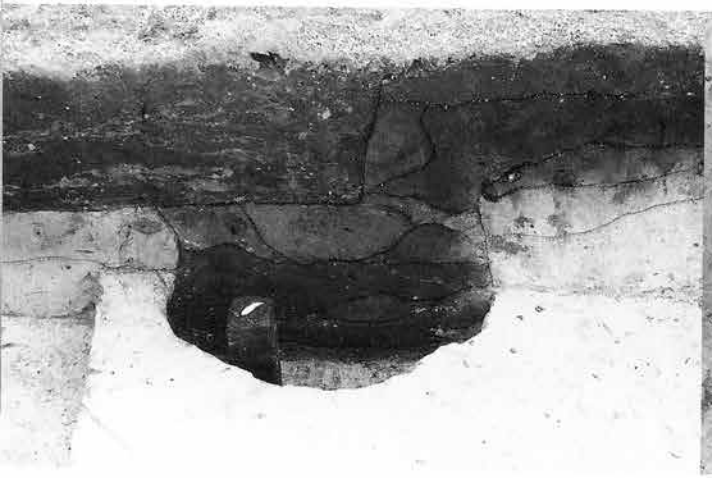
SK2・SK3 完掘



SK2 土層断面



SK2 完掘

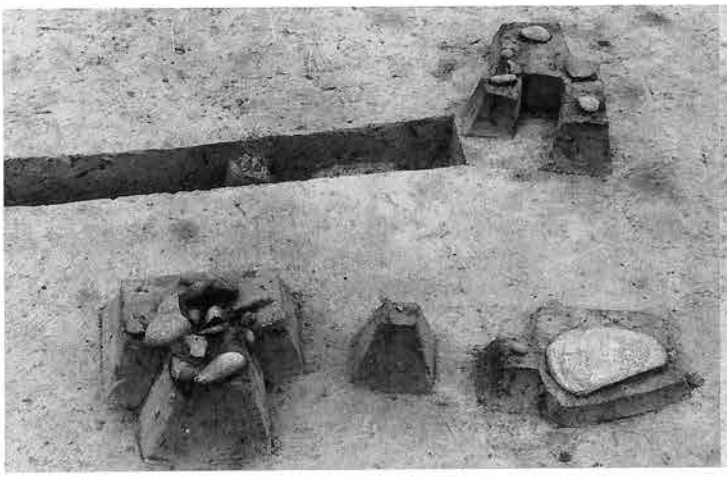


SK3 土層断面

SK3 完掘

Pit24 検 出 状 況

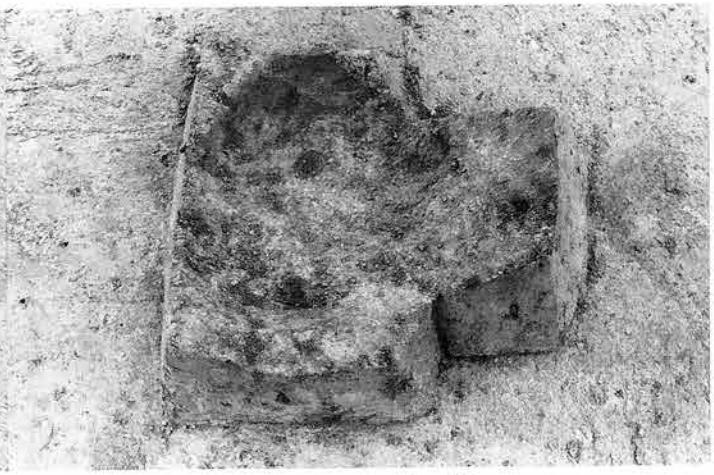
Pit24 土 層 断 面



集石41・集石42検出状況

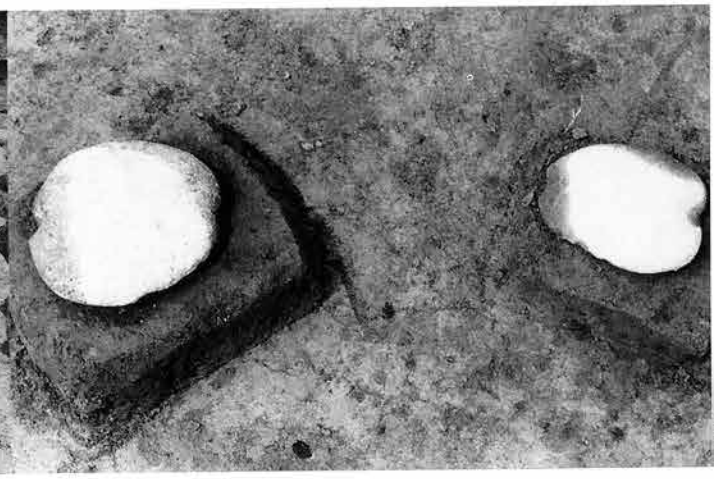
集 石 41 検 出 状 況

集 石 41 土 層 断 面

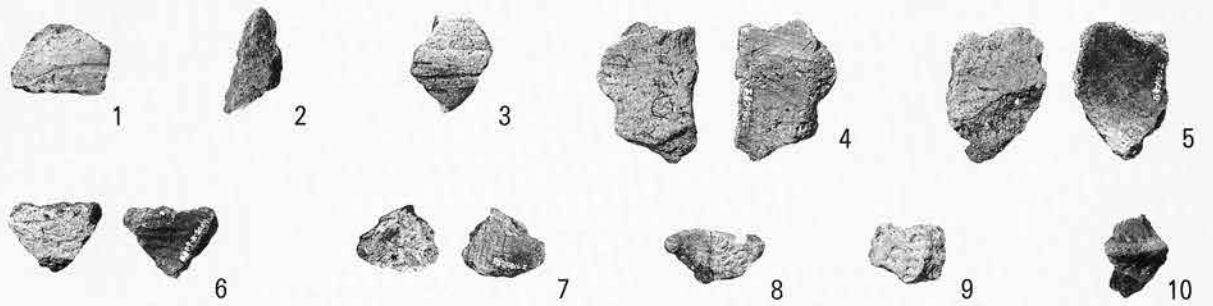


集 石 41 完 掘

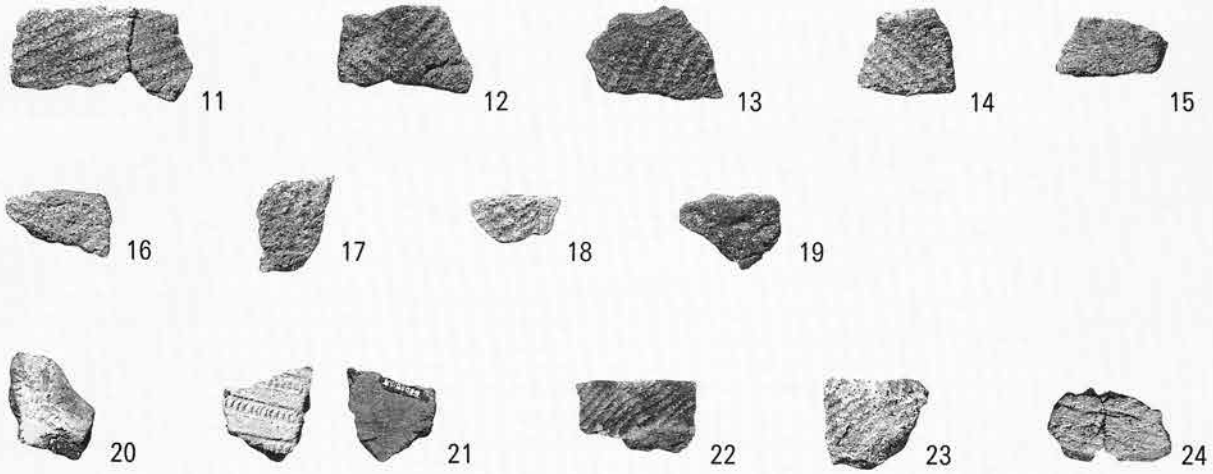
風倒木痕からの遺物出土状況



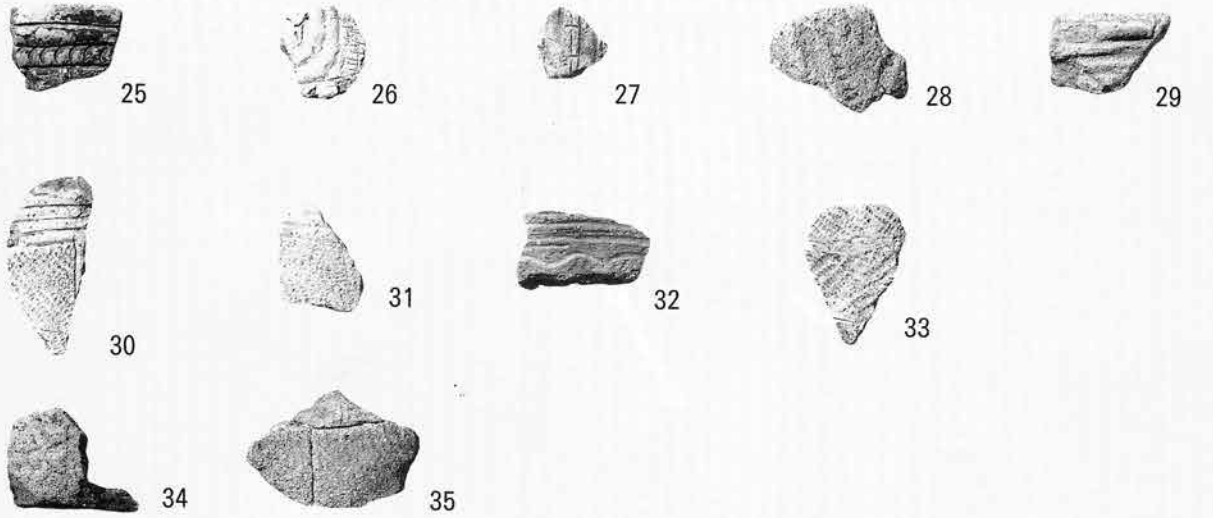
石 錘 出 土 状 況



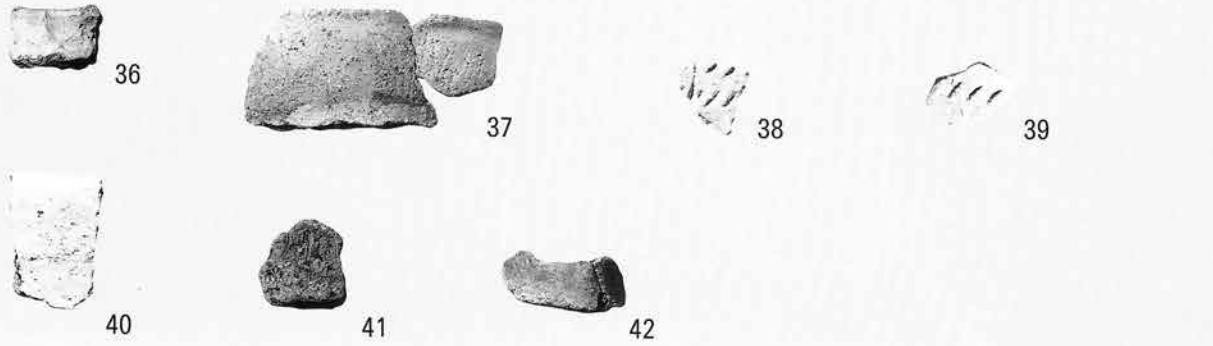
早期の土器
（1：3）



前期の土器
（1：3）



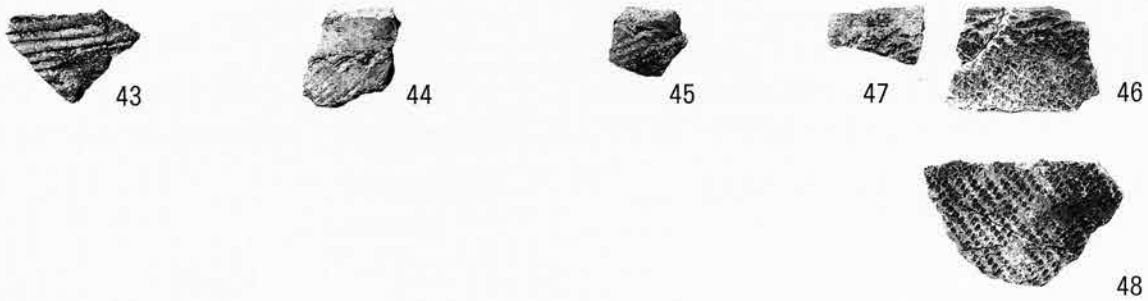
中期の土器
（1：3）



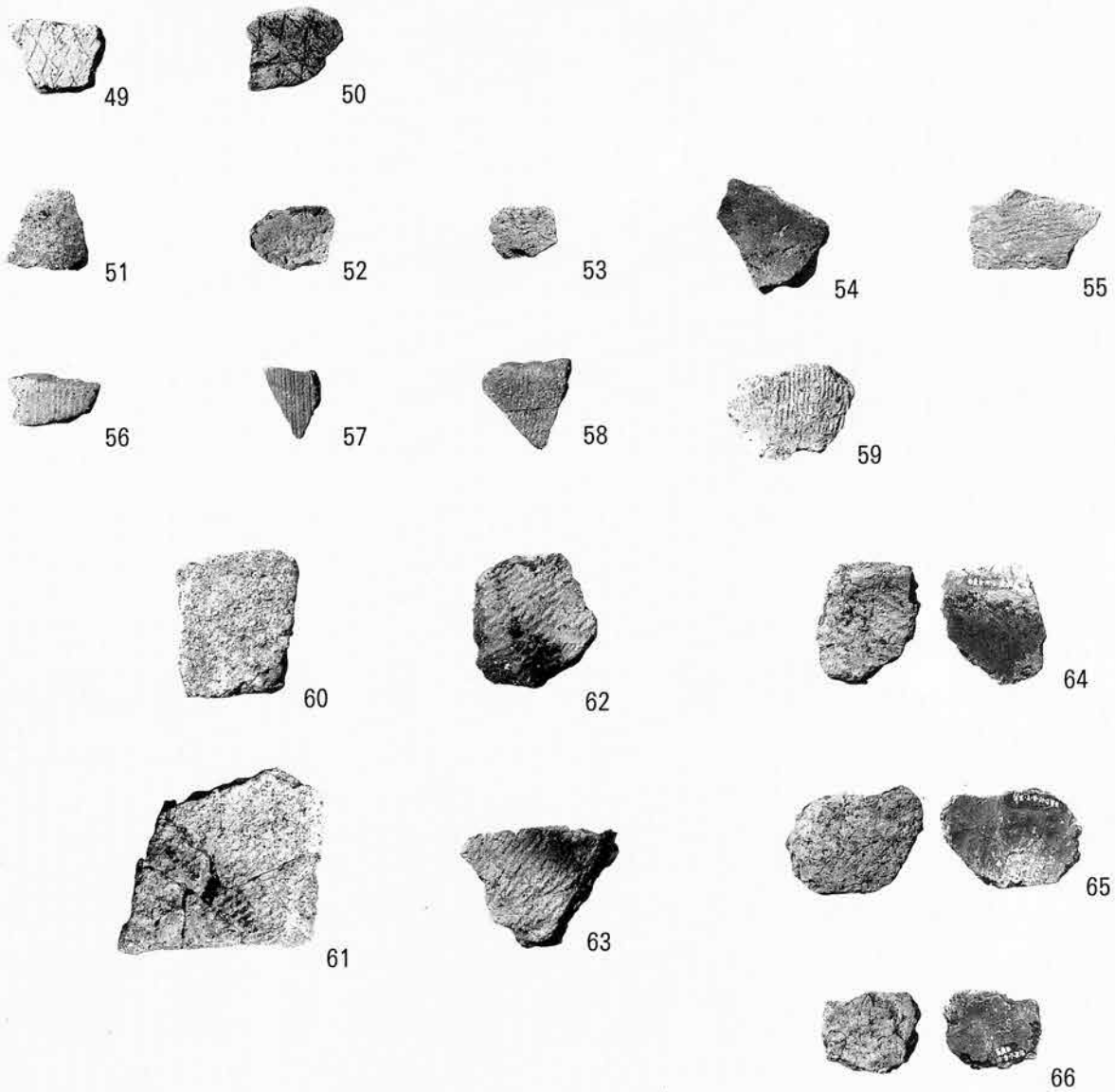
後期の土器
（1：3）

縄　文　土　器　1

晩期の土器
（1：3）

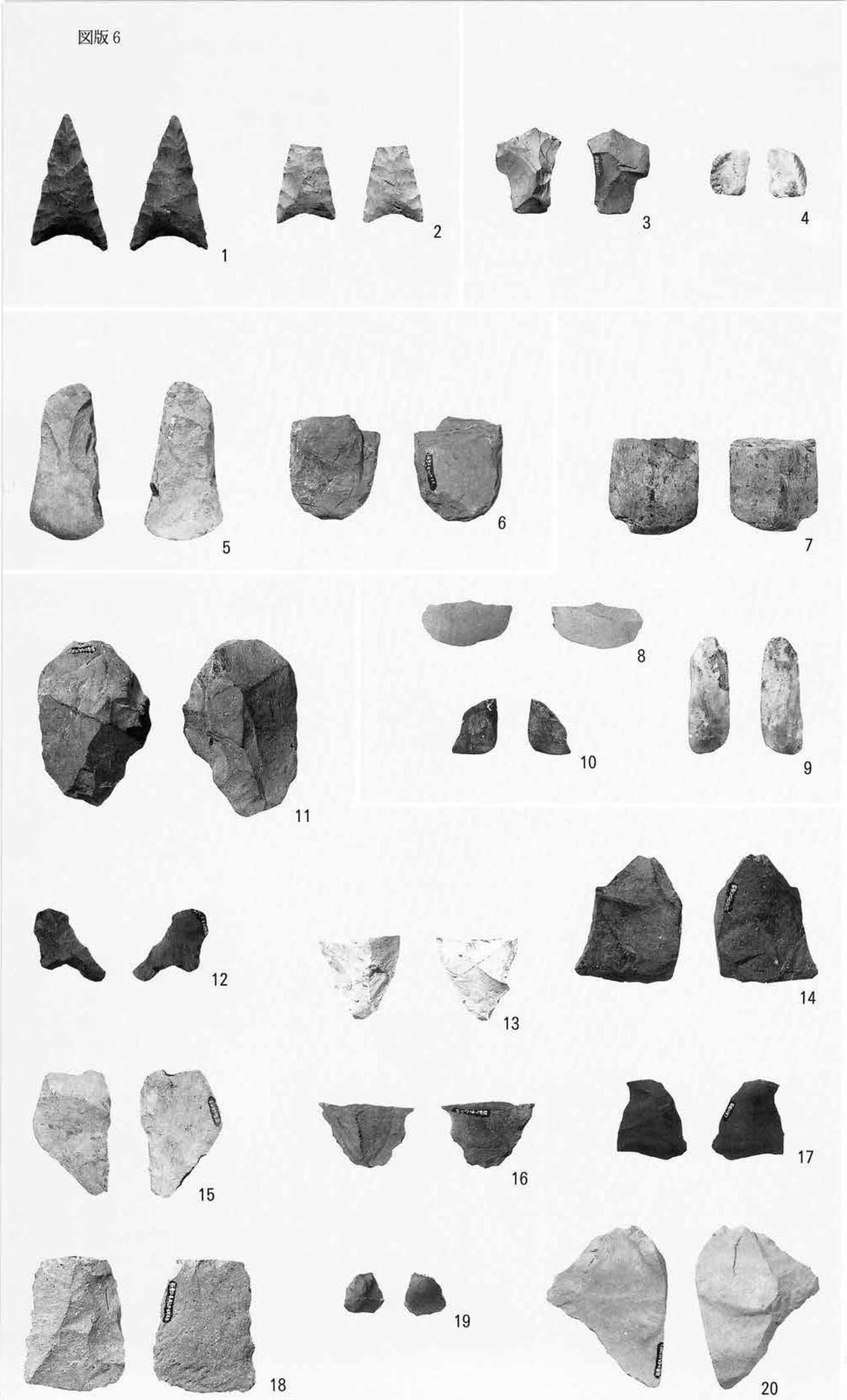


後・晩期の土器
（1：3）



土製円盤
（1：3）

図版 6



1．2
石　鏃
（1：1）

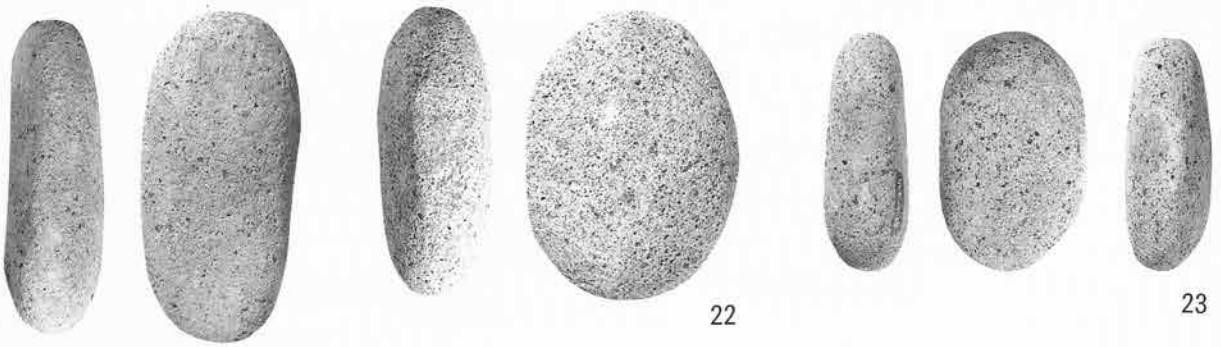
3．4
ピエス＝
エスキーユ
（1：3）

5．6
打製石斧
（1：3）

7～10
磨製石斧
（1：3）

11～20
不定形石器
（1：3）

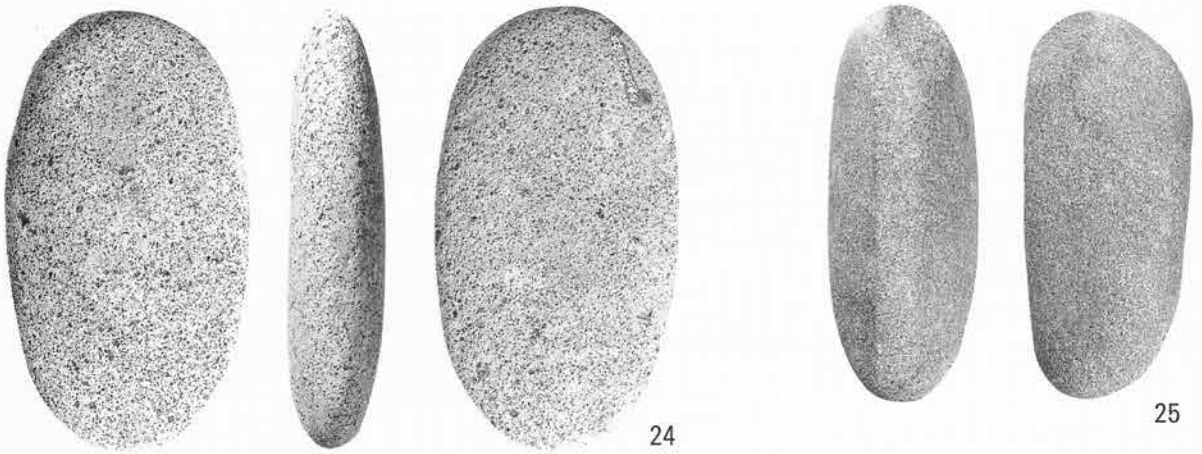
石　器　1



21

22

23



24

25

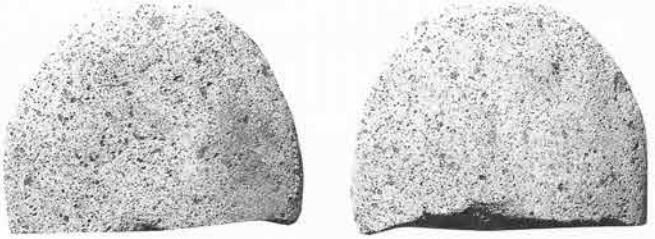
21～27
磨　石
（1：3）

26

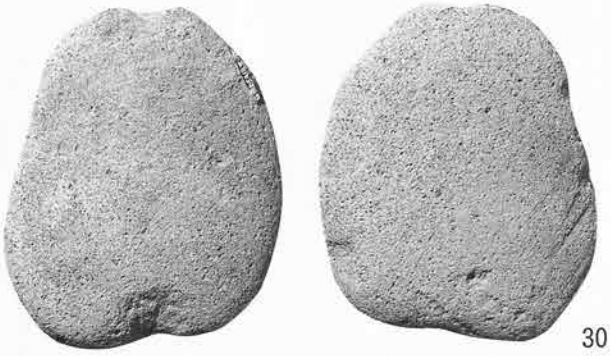
28

28
凹　石
（1：3）

27



29

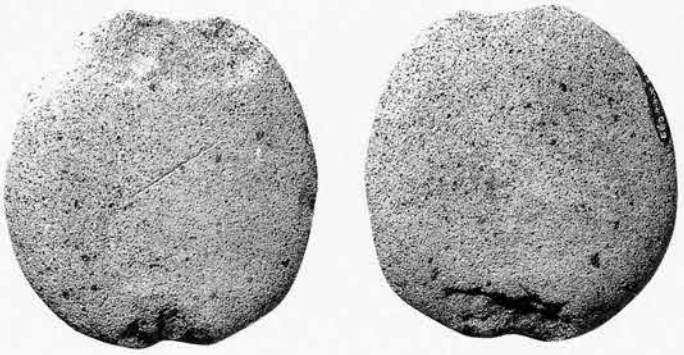


30

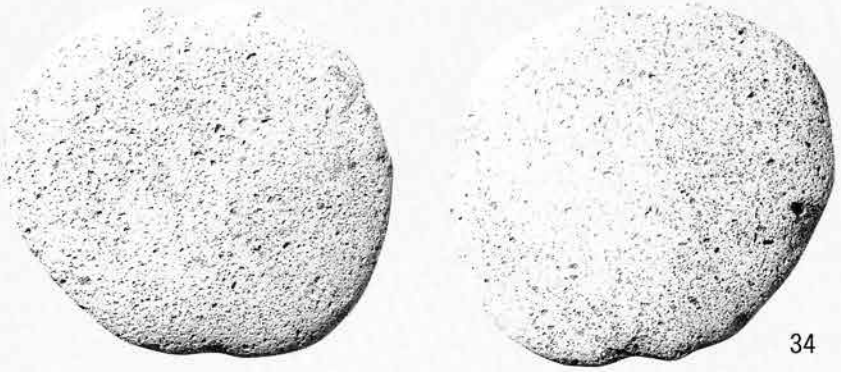
31

32

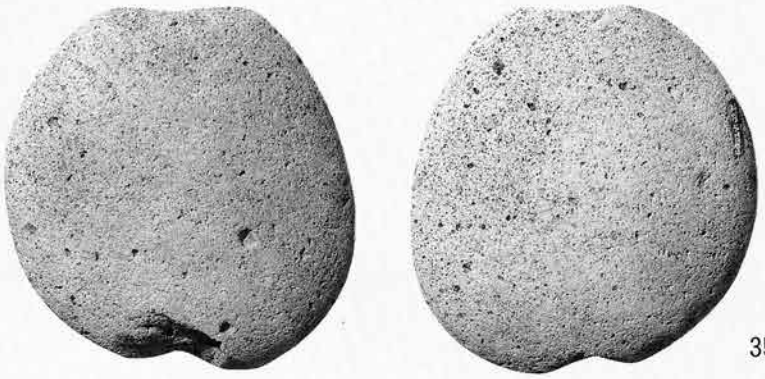
29～32
石　錘
（1：3）



33

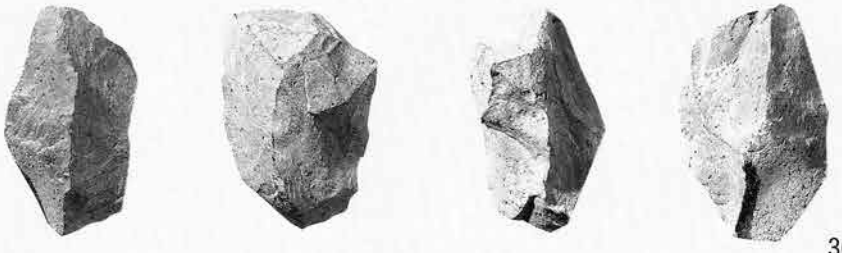


34

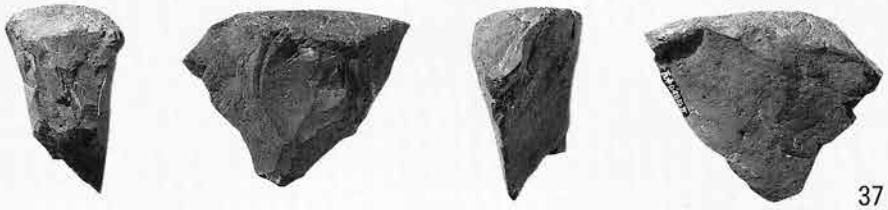


35

33～35
石　錘
（1：3）



36



37

36・37
石　核
（1：3）

報告書抄録

	ひゃくづか　ひがし　D　い　せき
書　名	百　塚　東　D　遺　跡
副書名	国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 66 集
編著者名	江口友子
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923－46　TEL 025－ 223－5642
発行年月	西暦　1995年３月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
百塚東D遺跡	にいがたけんおぢやし 新潟県小千谷市 おおあざさんぶしょう 大字三仏生	208	101	37度 19分 46秒	138度 45分 14秒	第一次調査 19920720～19920724 第二次調査 19930614～19930819	500 1,700	道路（小千谷バイパス取り付け道路）の建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百塚東D遺跡	集落	縄文時代後・晩期	土坑２基 集石遺構２基 性格不明遺構５基	縄文土器、石器	集落縁辺部

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第66集

国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書

百塚東D遺跡（ひゃくづかひがし）

平成７年３月30日印刷
平成７年３月31日発行

編集　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒950 新潟市一番掘通町5923－46
電　話　025（223）５６４２
ＦＡＸ　025（228）１７６２

発行　新潟県教育委員会
〒950 新潟市新光町４－１
電　話　025（285）５５１１
財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

印刷　㈲双葉印刷
〒950 新潟市網川原１－４－13
電　話　025（283）７３７３

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第66集 『百塚東Ｄ遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	３７度１９分４６秒	３７度１９分４５秒
抄録	東経	１３８度４５分１４秒	１３８度４９分０６秒